慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	洪熙の残照 (3)
Sub Title	Afterglow in Hong Xi Street, part 3
Author	奥村, 松平(Okumura, Matsuhei) 今井, 就稔(Imai, Narumi) 甲賀, 真広(Koga, Masahiro) 奥村, 武彦(Okumura, Takehiko) 上田, 裕子(Ueda, Yuko) 菅野, 智博(Kanno, Tomohiro)
Publisher	「満洲の記憶」研究会
Publication year	2023
Jtitle	満洲の記憶 No.9 (2023. 12) ,p.35- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32003001-20231200-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

洪熙の残照（3）

執筆：奥村松平

解題：今井就稔、甲賀真広

編集：奥村武彦、上田裕子、甲賀真広、今井就稔、菅野智博

解題

『洪熙の残照』は満洲瓦斯株式会社（以下、満洲瓦斯）総務部人事課長の故奥村松平氏（以下、松平氏）によって戦後に書かれた手記である。松平氏の略歴や当該手記を掲載するに至った経緯、史料的価値については、菅野智博、甲賀真広「満洲瓦斯株式会社人事課長の満洲追憶――奥村松平『洪熙の残照』解説」（『満洲の記憶』第 7 号、2020 年）を参照されたい。本解題では主に本号掲載分の概要を紹介する。

本号で掲載するのは、1945 年の 10 月から 1946 年の 1 月下旬までの内容である。大きく分けると、前半はソ連兵士とのさまざまな緊迫したエピソードが、後半は中国の公安に捕らえられて半月ほど監禁されていた時期のできごとが記述されている。その他にも、安東に残してきた家族の新京への帰還、自身が満洲へ赴いた経緯、厳冬期をむかえるにあたっての食糧や燃料事情、自身とその家族や日本の将来への不安などが綴られている。

ソ連兵士とのやりとりの多さはいうまでもなく、ソ連の満洲侵攻によって新京のまちにはソ連兵が跋扈するようになったことによるものである。松平氏も何度にもわたり緊迫した場面に直面することになり、本号は社長公館へのソ連兵の強盗とピ

ストルを突き付けられた話から記述が始まっている。その他、ソ連兵関係の事件としては松平氏の身辺に起きたものだけでも、メリケン粉の持ち去り、公館向いの一戸建て住宅の強制接収、社長公館への乱入と飲酒、日本人女性の物色、路上でのソ連兵との鉢合わせと金品の強奪といったことなどが起きており、ソ連占領下の新京のようすを生々しく伝えている。

本号の後半、年が明けて 1946 年 1 月 15 日、松平氏が中国の公安局によって社員二人とともに収監されるという事件がおきた。金銭にまつわる嫌疑だったという。収監された広さ 8 畳ほどの監房では、先に収監されていた日本人、ロシア語通訳者（彼は公安局から拷問を受けたという）、中国人八路軍兵士、東京音楽団の団員たちと居合わせた。そこでのエピソードが細かく記述されている。監房内の便所の水が凍結で流れなくなるほどの厳冬期に、1 月 30 日に釈放されるまでの半月ほどを過ごした。

図 1　奥村松平氏と長女廸子氏（1939 年、大連の自宅にて）

その他、安東支店への緊迫した現金輸送のようすや、安東に残された新京本社社員とその家族の新京への帰還、社長公館の床下に隠された 60 万円入り麻袋の帰趨など大きな出来事から、白米に混じった小石との格闘、食糧の調達や石炭の節約術などの日常生活、松平氏が渡満に至った経緯の振り返りや今後の不安などが詳しく述べられている。いずれも敗戦後の満洲における日本人のおかれた状況の一端を理解する貴重な手がかりとなろう。

最後になるが、新型コロナウイルスが依然として収束しないなかにもかかわらず、本号分の掲載についても奥村武彦氏と上田裕子氏から多大なご助力をいただいた。お忙しいところご協力をいただいたお二人には改めて深く感謝を申し上げる。

図 2　1942 年 6 月小平島（大連）へハイキング

註：一番右奥村松平氏、最前列一番右長女廸子氏

凡例

・本号の掲載分については見出しが付されていなかったため、読みやすさおよび前号までの流れを考慮して小見出しとして編集者が付した。
・本号に掲載するのは 1945 年 10 月－ 1946 年 1 月分の回想であり、それ以降の部分は次号以降に掲載予定である。
・旧字体や異体字、表現等は、資料の性質を考え原文のままにし、明らかな誤字と思われる箇所は訂正して掲載した。
・判読できない文字は■とした。

本文

ソ連将校強盗

社長公館の表玄関の扉は、避難で離京する折、施錠されたまま再び開かれることはなかった。出入は専ら裏の勝手口を利用するのが慣例となった。勝手口の扉を開けると、狭い踏込みを除いて広い板の間の炊事場になっていた。その奥は大きい応接間で、真中の大きなテーブルを囲んで立派なソファーが備えてあった。応接間を出ると玄関に通じる廊下で、一階の居間は八畳と六畳が並び、三尺の廊下の北側に三畳の間及風呂場やボイラー室があった。玄関を入るとすぐ階段があって、二階の大広間へ通じていた。曽つてその広い畳の部屋で、満鉄本社から派遣された監査役を接待したとき、私は食事のあと毛利という名の人と碁を楽しんだことがあった。長門の毛利家縁由の人だったかも知れなかったが、余りにも激しい世の移り変りを痛感するばかりである。

気温が少しづつ下り始め、越冬の準備が愈々必要となっていた。内外の社宅の社

員達は厳しい冬を前に家族と離ればなれの生活が続き、皆心配していた。当面の資金はまだ充分残っていた。越冬野菜の配給を手配をせねばならない時機が迫っていた。公館の応接間では社長を囲んでその対策を協議し始めていた。

或る日、突然勝手口が開かれる音がした。誰か社員が入って来たのかと席を立とうとしたとき、ドアを押して現れたのは背の高い一名のソ連の将校であった。広い胸に幾つかの勲記をつけていたので、将校であることは明かだった。右手にピストルを持ち、しかも土足のままである。押込強盗だと直観した。何か静かに喋べったが、その言葉が判る筈が無い。が喋べり乍ら右手のピストルで奥の部屋へ案内せよとの意思表示をしていた。社長は一瞬困惑の表情を浮べたが、逆らうことは無駄だと観念して、誰か奥の部屋へ案内するようにと目で合図をした。そのソ連将校は、細面の目鼻立ちのすっきりした中年の優さ男だった。こんな将校までが強盗に来るのかと一寸意外だったが、瞬間私は起ち上っていた。将校は私にピストルをつきつけて先に歩けと指示した。応接室を出て真中の廊下を突当りまで進むと、奴は私の後からついて来た。一番奥の部屋の入口まで進むと、将校は靴のままその畳の間へ踏み込むなり、すぐ何かを物色し始めた。その部屋の中を見るのは私にも初めてのことだった。六畳の間一杯に家財道具、布団、衣類や反物などが所狭しと積み上げられ、入口の畳一枚分も残さない程乱雑になっていた。その中をひっくり返し乍ら探し始めたのを見届けて後、私は廊下を応接室の方へ二米ばかり戻りかけた。廊下を戻り乍ら心中で「物色するなら好きなだけ物色しろ、強盗の仕事の最後迄立会っていられるかい」と考えつつ、あと戻りし乍ら「ゲーペーウーに報せるぞ」との振りを見せれば、奴さん泡食って逃げてゆくのではないかと、存りそうにもない甘い事迄を頭の中で考えていた。ところが、入口に私がいないと気付いたのか、すぐ出て来た将校は再び私の背中にピストルをつきつけ入口へ戻れと命じ、そこを動くなと動作で示してから再び物色を開始した。結局、絹の反物赤いのと浅黄のものともう一巻きを左脇に抱え、如何にも満足そうに出て来るなり、何も云わずに勝手口から立去って行った。この間約三十分ほど、私も社長らも、只阿然としてなす術なく、すべてを諦めながら成行きを見守るより外はなかった。ソ連の将校までもがこんなことをするようでは、一般兵卒どもが物盗りしても当り前で、ソ連全体が力づくの盗棒の集団だと考えざるを得なかった。

私はこの時初めて、社長公館も他の社宅同様、暴徒に襲撃される危険を感じてい

た。直接社長に問いただしたわけではないが、窓の暗幕は他と同様になくなっていたし、絹物は残っている。避難中この社長公館も満人の群れに襲われて木綿物は全部持ち去られたのかも知れなかった。その上社長が安東から帰還後、自分独りが寝む部屋だけを片付けて余分のもの全部を奥の一間に放り込んだのかも知れぬ。でなければ、あれほどの乱雑はない筈と何も云わぬ社長が気の毒になっていた。社長の妻子も勿論まだ安東へ避難中だし、社員たち同様その安否を気付っている筈だ。悩みを同じくする社長に対してより以上の親近感を持つようになっていた。

避難生活の諸相

この頃、北満からの難民についての噂が聞えてきた。新京へ辿りついて空き家となった元軍人社宅へ入居させられた難民たちの男は、その後組織された日僑居留民会（会長元満業総裁、高碕達之助）の仲介があったのか、ソ連軍の使役に雇傭されて働く者が多くなっていた。その人たちは一日何時間かの使役を終って放免されるときには、賃金代りに元日本軍の軍需品倉庫の貯蔵品、罐詰、味の素等なんでも好きなものを持てるだけ持ちかえらせたという。従って、体力のある者ほど大きい箱を肩にして帰えることが出来た。これらの人々はこうして使役で得た品物をお金に換えて生活を支えていた。それが翌年引揚げ開始に至るまで、どん底での難民たちの生活の資となり、果てはそれらを売った結果蓄財することが出来、次第に高価な品に代えて帰国に備えることが出来たとのこと。所持品の売り喰いで生活していた私共より裕福に暮すことが出来た。人生は万事塞翁が馬、思わぬところで変化するもので、その禍福はあざなえる縄のようだと諺にある。運命のいたづらで、大きな変化を齎らすという見本のような話がここにあった。勿論このようないい話ばかりではない。厳冬となった頃、鉄西地区ではいくつもの大きな穴が掘られ、難民の凍死体が多数この穴に放り込まれて葬られたという話も伝えられた。すべては運命というより他はない。

越冬野菜は、平年なれば馬鈴薯、南瓜、甜菜大根、白菜、キャベツ等を希望に応じて夫々の社宅に届けるのが厚生課の慣例であった。然し、今はどの社宅も空き家同然で所によっては男子社員が一人住まいしている状態で、家族はみな疎開中だから希望の調査なんて勿論不可能なこと。従って、各社宅群の在宅社員のところへ一括して届けて委託するより外ない。品種の希望を徴するわけにゆかない。最低限所

要と考へられるものを手配して満人に依頼して届けるより外はない。その主たるものとして、馬鈴薯、大豆、甜菜大根を選び、十月末頃までには全社宅群へ届けることを計画、実施に移されたので、不充分ながら各社宅へ届けられていた。

十万円送金事件

安東の気温は新京ほど厳しくないが、全員が殆んどの所持品を新京に残したままの避難であるため、今のままでの越冬は何としても無理である。なんとしても、新京へ帰還できるように方策を講ずる必要が迫っていた。なんとかその方策も考えて、実行することが決定された。

先立つものはお金である。相応の金額を安東に届ける工夫が必要となった。経理課長が社長と相談した結果、十万円程を用意することになり、公館に保管中の麻袋から紙幣を取り出して数えた後、製図室から持ち出した大きなトレーシングペーパーを重ねて包み、縦横に何箇所も厳重に紐をかけた。その大きさは略々二十五糎角の塊となっていた。このように梱包が完了して容易には破れないとの確認がなされた。だが、ソ連兵の強盗集団がうろつく中を持ち運ぶのは極めて危険だと誰もが考えていた。それで文書課長の樋口君が満鉄本社へ相談に行った。そこでソ連語でタイプされた贋のソ連極東軍司令官発行の証明書を作って貰い持ち帰って来た。その証明書とは、縦十糎、横十五糎ほどの洋紙にソ連文でタイプされた一枚の紙切れで、その文面には説明によると、「この者はソ連極東軍司令官ワシユレフスキー元帥の命により操業している新京市ガス会社の社員であることを証明する」と書かれていた。唯の紙切れ一枚であっても無いよりはましで、これは名案だとみなが納得した。だが樋口君が「この紙だけでは如何にも物足りない。どうしたらよいか」と云う。私は「それならその文面のど真中に大きな角判を押印したら証明書らしくなるのぢゃないか」と提案。そうしようということになり人事課の私の机の抽出しにあった最も大きい「満州瓦斯株式会社之印」の角判を朱肉でその洋紙の真中に念を入れてしっかりと押印した。その結果それはどうやら本当の証明書らしいものが出来上がった。これでよしとみなが満足した。どうせソ連兵は文盲か、まともな教育を受けたやつは少ないだろうと云うのが私たちの推測であった。しかし、証明書はこれでよいとしても紙幣の紙包みのままでは如何にも心もとない。更に一工夫をせねばと協議の結果、大きな握り飯に偽装すると決めた。それに要する充分な量の白

米を焚いて貰い、人事課の机の上で三人の作業が始った。再び製図室から最大のトレーシングペーパーを持ち出し、何枚かを重ねてその上に炊き上った御飯を部厚く敷きのべて、その中へ紙幣の包みをおき、その上部も周りもすっかり御飯でぬりつぶし、本当に大きな握り飯か雪達磨の頭部のようなものが出来上った。それを更にトレーシングペーパーで包み、簡単に剥がれないように丹念に紐をかけて完了した。それを一番大きい木綿の風呂敷に包み込んですべての準備が終了した。

大きな握り飯の包みはこうして出来上ったが、最後の問題は、この最も大事な使命、即ちこれを無事に安東支店へ届けるという仕事を社員の誰に托したらよいか、一切がその人選にかかっていると云ってもよかった。丈夫な身体と強靭な精神力の持ち主で、更に時に臨んで機智機転を発揮出来る人物でなければならない。三人でこの条件に合う社員を選ぶことに、さして時間は要しなかった。間もなく用度課員だった北沢要君が最適任者として選ばれ、これに異議をいうものはなく合意していた。北沢要君は長野県の出身で前の条件にぴったりの人柄だった。彼なれば、この大事の使命を充分に果してくれるに違いはないと誰もが賛成だった。そうと決まれば一時も早くとすぐ連絡がとられ、間もなく出頭した北沢君へ唯一人で安東へ使いすることが要請された。その使命は、第一に安東支店長に無事にお金を届けること、次に新京本社員の家族、安東の所属員を問わず、その生活維持の資金とすると共に、第三に可能な限り早期に新京組の帰京が叶うように安東支店長が満鉄■他要路に即時交渉を開始すること等を社長の命として支店長に伝達すること等が口頭で社長から直接北沢君へ伝えられた。北沢君はさして緊張するでもなく之を聞いていた。そして樋口君から例の俄造りの贋の証明書が渡された。北沢君にその証明書の内容が説明された上で、万一風呂敷包みがソ連兵に盗まれるような危険が迫ったときは、必ずこの証明書を提示して難をさけるよう、胸のポケットに、しっかり仕舞っておくようにと念が押された。北沢君は使命の重要さを充分知った上で、必ず無事に安東へ届けますと決意の程を述べ皆を安心させた。

間もなく、北沢君は奉天行の列車を運転する満鉄社員に頼み、機関車に続く石炭車の上に乗って新京を後に出発して行った。あとはただ只管途中事故がなく、北沢君が安東へ到着して目的を果してくれることを祈るばかりであった。それから後北沢君の出発後の情報は望洋として一切掴むことが出来ず、すべては神仏の助けを願って待つばかりの日々であった。その詳細は、後日北沢君が無事に家族ら一同と

新京へ帰還して後、初めて明かとなったのだが、案の定問題が奉天駅前広場で起ったとの話だった。奉天に無事に到着して後、奉天駅前広場で安奉線の安東行列車の出発を待っていたとき、ソ連兵が北沢君の風呂敷包みに目をつけて、之を持ち去ろうとしたという。それを奪われては大変だと、北沢君は例の証明書のことを思い出し、そのソ連兵を追いかけて胸のポケットに大切に仕舞っていた例の贋の証明書を取り出して、ソ連兵に提示したところ、そのソ連兵の奴は文字を読めたのか吃驚仰天、風呂敷包みを放り出して逃げて行った。辛くも難を免がれて、北沢君は無事に風呂敷包みを取り返してから以後は、災難もなく安東に到着して安東支店長に届けた上､社長からの伝達事項をすべて伝えることにより無事に大任を完遂してくれた。その結果として、後日新京組がすべて帰還を果すことが可能となったわけで、危険の多い中でこのような大仕事が成し遂げられたことは全く予想外のこととその成功に大悦びしたことだった。

唯何十年も経った後日、斯友会という社員会の会合の際、当時安東に残留していた労務課長の向畦地君はこの十万円包みの安東送達問題は全然知らされてなく、記憶にもないと云っていた。又私の家族もお金が乏しくなり薩摩芋や高粱で飢えを忍いでいたことなどを知り、その十万円が安東支店長によってどのように処理されたかは、今となって全く知る由もない。只危機一発のところで、新京組社員家族の全員が十一月半ばに新京へ無事帰還を果すことが出来たので、その最大の目的を果し得たことを以て良しとしなければならない。

逮捕された知人警官

新京特別市は、その昔長春の居留地当時から駅を起点として道路が放射状に設けられ、中央の直線の大通りは中央通大同大街と名付け、市街を南北に貫通し、東の斜道は日本橋通り、西の斜道は敷島通りと名付け、夫々その途中に東広場、西広場が設けられていた。東広場は経済活動の中心、西広場は緑が多く近くに敷島小学校が、又少し離れて新京商業学校があるなど静かな素晴らしい環境の中にあった。その林間に頭部が独楽のような形をした給水塔が、又もう一つ円筒形をした第二の給水塔が設置され、附近の住宅への給水の目的を果していた。その丸い第二の給水塔の下部に海軍武官府がおかれていた。日本陸軍の基幹である関東軍司令部の堂々たる建物とは比較にならない貧弱な武官府であった。けれど、小さな施設とはいえ、

満州に何故日本の海軍の施設が必要なのか不思議だった。何でも松花江の水域に海軍省所属の哨戒艇があるとかで、それを管理する目的の官庁が、この西広場の丸い給水塔にひっそりとおかれていたと聞いた。

或る日、我が社の若い社員が本社へ来る途中でこの海軍武官府の傍らを通りかかった。するとその時、上の窓からヒラヒラと小さな紙片を丸めたものが落ちて来た。ふとそれに気づいて何気なしに紙切れを拾って拡くと数行の文字が書かれていて、それを書いた日本人がソ連軍によってそこに閉ぢ込められているから、その事を自分の家族へ知らせてほしいと書かれていた。驚いた社員が本社へ着くと、すぐ私にその紙切れを差し出した。その小さな紙切れを拡くと新京市内の住所と家族の名前、恐らく奥さんだと思われる名が伝言文と共に書かれていた。私はその伝言文よりも、それを書いた本人の署名を見て驚いた。その人は私よりも年配の元敷島警察署の警部補か階級は知らないが、私が本社人事課長として着任以来、兵事も担当した関係から、折にふれ警察署兵事係のその人のところへ度々連絡のため出頭して面識があったからである。松本という名であったように思うが、今は正確には思い出せない。あの警察官が、ソ連軍によって海軍武官府に捕われの身となっている。今後どうなるのか。ソ連へ連行されるのかも知れない。如何にも気の毒だがどうしようもない。只御無事を祈るのみである。私はすぐに社員に紙切れを返却してこれまでの経緯を簡単に話した後、是非ともそこに記載されている住所を訪ねて、ご家族へ届けて上げてくれるよう頼んだ。その社員からは必ず届けますと返事がかえって来て私を吞ばせたが、その後彼の運命については茫としてなんの消息も掴めないままであった。

ソ連兵の食料強奪と中国人巡捕の発砲事件

気温は少しづつ下降していたが、敗戦後の異状な環境のせいか、気候のことは少しも苦にならなかった。誰もが云わず語らずに気が立っていたのかも知れない。皮肉にも八月中旬以後は雨の降ることはなく、ずっと晴天がつづいた。時々ソ連兵が本社構内へ姿を現わしたが、何事も起らないまま、又ぶらりと出て行くのが見られた。何かを物色に来たのかも知れないが、殆んどガラン洞になった社内にはもう彼らが目指すものは何一つ残っていない筈だった。

そんな状況下の或る日、突然ソ連兵数名が乗ったトラックが本社正門から侵入し

て来てすぐ傍らの食糧倉庫前に停った。数名のソ連兵は付剣の銃を持っていた。社員の通報で出て行くと、食糧倉庫の施錠を外ずせとソ連兵が命令した。鍵は誰が保管していたのか命令に抵抗は出来ない。施錠が解かれると数名のソ連兵が倉庫に入り収納されていたメリケン粉の袋をトラックに移し始めた。相手がソ連兵では何とも手の施しようがない。構内社宅の社員たちも遠巻きにしてただ眺めるばかり。樋口君の傍らに行き話しかけたが、彼も茫然と見ているばかりだった。そのとき私はソ連兵の他に一名の背広服姿のロシヤ人がいるのに気付きその男の顔を見て驚いた。なんとそのロシヤ人は興安大路の独身寮の隣の喫茶兼菓子店アストリアの主人ではないか。二、三度その店に行ったので、顔を覚えていた。彼は白系ロシヤ人として恐らく長春時代から在住していたのだろう。ソ連軍の侵入以来その手先となり情報集めに協力している内に、ここにメリケン粉があることを知り己れの点数稼ぎのためにソ連兵に通報の上手引きして来たのだと直観した。けれどどうして判ったのだろうと不思議だった。ひょっとしたら情報を満人から得たのかも知れない。本社食糧倉庫へメリケン粉を運び入れたことは余り知られていない筈だが、八月二十日頃構内にはまだ満人が居たかも知れない、又中国人苦力も居たので、彼等からその情報を得たのかも知れないとの結論に達していた。全く油断も隙もあったものでないと思い乍らも、只傍観するより他はなかった。

ソ連のトラックは余り大きなものではなかったので、間もなく満載となって門から出て行った。が食糧倉庫の東、西両側に二名の歩哨兵を残していた。それは再びメリケン粉を取りに来ることを示していた。大切な白米の麻袋が盗られるのを傍観しているわけにはゆかない。すぐ手を打とうと樋口君が歩哨兵の買収を提案した。北川君が公館から幾らかのお金を持ち出し二名のソ連兵に手渡し、暫く倉庫入口から離れることを手まねで求めた。ソ連兵はそのお金に満足してかすぐ部署を離れた。それとばかり男子社員全員が倉庫から白米入り麻袋をどんどん構内の各社宅に移し始めた。皆必死だった。各社宅に二、三俵くらい宛を移し終えるのにさして時間はかからなかった。こうして白米全部を運び終ったころ、二度目のソ連のトラックが来て残りのメリケン粉袋を全部運び去り、同時に歩哨の姿も消えた。正に危機一発の離れ技であった。そして倉庫にはバラ積みの高粱が大量に残るだけになっていた。ところがこれを構内社宅の東側生け垣の外の路上で、通りがかりに見ていた満人二、三人が居たのに気付いた。けれど会社の食糧倉庫から社宅へ移しているのだからと、

私は強いて懸念を打ち消そうとしていた。けれど、外部の人たちは異様に感じたかも知れなかった。案の定、数日後にその答が意外の形となって現れた。その所属は判らないが、一名の中国人巡捕が一台の馬車を伴い満鉄社宅との間の道路をやって来るのを目撃し、オヤと不審と不安を持って眺めた。間もなくその巡捕は馬車を停めて道路沿いのまばらな生垣を跨ぎ、社宅と社宅の間の広場に入って来た。丁度その時、鵜木栄君がその広場に居た。巡捕はピストルをかざしつつ鵜木君に何か話かけているのを遠くから見守っていた。するとその巡捕は満人に指示して社宅の廊下にあった白米入りの麻袋を二個馬車に積ませた。白米を積み終えた馬車を挽いて満人が動き出したとき、私は両者間の問答の内容を知ろうとその方向に歩を進ませながら鵜木君に視線を注いでいた。彼と巡捕の間は 1m ほどの間隔であった。その時突然ピストルの音がして、鵜木君の大きな身体が回転し乍ら倒れるのを見た。驚いた私は走って現場に駆け付けた。「大丈夫か？」と尋ねた。「腹を射たれた」と鵜木君が倒れたまま答えた。ピストルの音に驚いた社員が数名とんで来た。「すぐ病院へ連れて行こう、戸板を」と叫びつつ傍らに茫然とつっ立っている巡捕を私は睨めつけた。巡捕はとんでもないことをして了ったと自分の所業を後悔するような困惑の表情を示しつつおろおろしていた。恐らくピストルで人を射ったのは初めてらしく、最初の威勢も消し飛んでしょんぼりしているのが感じられた。今はそんなことかまけている時ではない。すぐ皆で鵜木君を戸板に載せ外科病院へ急いだ。四人が戸板の四隅をかかえ、私は傍らに附き添って歩いた。着いた外科病院は日本橋通りだったように思う。戸板に載せたまま玄関から担ぎ入れそのままベットの上に載せた。すぐに現れた白衣の院長先生に簡単に経緯を話して治療をお願いした。先生は承知して、鵜木君の血のにじんだ衣類を手繰り上げて、左脇腹の傷口を見るなり「弾丸は脇腹を貫通している。たいして心配することはない」と診断を下しつつ、私に弾丸の傷跡を見せてくれた。成る程二つの穴が口をあけている。先生は脇腹の弾丸の入口と出口の患部を消毒してから、綿棒にヨードチンキをたっぷりと含ませた上丁寧に傷口に塗り付けただけで包帯をすることもなく「之で大丈夫、幸いに脇腹の脂肪の厚い皮膚部を貫通しているので腹には異常がない。すぐによくなります」と笑いながら語った。外科手術が必要だと心配していた私たちは拍子抜けしながらも、軽傷と知り安堵の胸を撫で下して、先生に厚くお礼を述べて再び戸板のまま引揚げて、鵜木君の自宅座敷の床の上寝かせつけた。

鵜木君は元海軍兵曹長だった。その話では、巡捕が突然ピストルを構えた瞬間、射たれると直観して、銃口を避けて上体を右へ振ったので横腹を撃たれたようだと話した。現役で厳しい訓練を受け、咄嗟の際にも気丈に対処出来たその精神力と身のこなし方に、歴戦の兵士の強さを見た思いで、普通の者なら敢なく死亡するか、大怪我をさせられたものをと驚嘆しつつ、軽い傷で済んだことを𠮟んだ。その意見では、襲ってきたのはやはり公を装った巡捕の個人的物盗りらしく、同君の言葉に逆上した結果のようだった。彼はその後一週間ほどですっかり健康を取り戻していた。中国の巡捕はこれ以後再び現れることはなかった。構内社宅はこうして家族を欠いたままで、以前の静けさを取り戻していた。

越冬準備とソ連兵対策

安東へ向った北沢君の情報は何も掴めないまま焦燥の日が過ぎていた。唯彼ならば無事にその使命を果してくれた筈だと祈りにも似た推測が公館を支配していた。そして家族たちが全員無事新京帰還を果した場合を考えて更に越冬のための更なる準備の手配を相談し始めていた。問題は各家庭の冬の暖房用石炭をどうするか。石炭は量的に充分ではないとしても、燃料用石炭は相当量が製造所の炉室の上のサイロに隠匿貯蔵してある。ソ連軍が瓦斯事業再開に熱意を示さない今、そして今後もその実現の可能性が絶望と見込まれる現状となっては、この石炭を各社宅群及び独身者寮に運搬する方策を検討しなければならなかった。公館では、そんなことを頭におき乍らも名案が浮かばないまま数日が経過していた。その頃は他に何も仕事がない無聊の時間を過すべく、社長が又樋口君が情報をさぐり旁々満鉄本社の知人を尋ねてか、行先も告げずにぶらりと公館を出て行っていつまでも帰って来ないことがあった。満鉄本社も既に早くからソ連に接収されてその管理下にあり、以前のように出入が自由であったかどうかは判らない。

ある日の夜、樋口君がどこでヒントを得てきたのか、石炭運搬に就いて名案を持ち出した。その案とは南新京駅の近くに設置されてあるガスホールダーの厳冬期を守るために、その暖房用に必要な相当量の石炭の運搬許可をソ連軍極東軍司令部に願い出ようというものであった。早速之が実行に移されることとなり、高田社長は樋口君を伴って軍司令部に向い実情を述べて石炭運搬許可書の交付を受けることに成功した。尚トラックによる石炭運搬の際の不測の危険を防ぐために、ソ連兵の護

衛をつける許可証をも併せて獲得することが出来た。この二つの許可書さえ入手した上は鬼に金棒であった。その石炭運搬許可書に、その目的の外に運搬先が記載されていたかは知らなかったが、仮令許可書の内容がどうであろうと、後は護衛兵を買収すればよい。計画は早速実行に移された。現場作業に従事して来た社員が動員されて、製造所の炉室上部サイロから石炭を下ろして、トラックに積み替えた上、ソ連警備兵を同乗させて市内の各社宅へ次々と石炭を運び込むことに成功し、一日がかりでこの作業は完全に終了し、一同心から快哉を叫ぶばかりの哀びに満ちていた。あとは社員家族の全員が無事に新京帰還を果し得ることを祈りのみであった。

けれど相も変らず非番のソ連兵が、ぶらりと本社構内に侵入して来ることが続いていた。そんな頃のこと、公館を出て構内の様子を見廻ってから正門前の自動車車庫前まで歩いたとき、一名の若いソ連兵が入って来た。年の頃はまだ十代だと思っていた。こんなことは度々だったので、私は恐れる気持ちは全くなく、又来たかという思いで彼を見ていた。彼は私に気付いて近寄って来て何かを喋ったが、私はその意味が判らないという素振りを示すと、彼は笑みを浮かべつつ車庫前の何かに腰を下ろした。暇をもてあましているのだなと察したので、暫くその相手になってやろうと考え私も彼の左横に並ぶようにして腰を下ろした。ソ連兵も日本兵同様に黄緑色の軍服を着ていたように思う。彼はさかんに喋るが、何を云ってるのか私に通じるわけがない。その時私の視線は彼の左手首に注がれていた。丁度腕が袖に覆れるあたりに青色の入れ墨で 19 の数字が刻まれ、更に腕骨と掌骨との間にぐるりと腕を取りまくように一本の青い輪が入っていたのを見逃さなかった。彼は囚人兵だと察した。こんな若い年令で、どんな犯罪を犯したのか知らないが、こんな入れ墨をされては一生浮かばれないのでないか。而も兵卒として極東迄派遣されるとは。ソ連軍内で恐らく人間扱いをされていないのではなかろうかと、些か可哀そうになった。その時その囚人兵は左の掌を握りしめる形を作り、その親指と人差し指の小さなその輪の中へ右手の人差し指を差し込み「クスクス」と云い乍ら右の指を抜き差すように動かしつつ「ヤポンスキマダム」と呟いた。それが何を示しているかは、私はすぐ覚っていた。こんな若造までが何を云うかと強い怒りを感じながら「ヤポンスキーマダム、ニエット」と答えて私は立ち上りすぐその場を離れた。私の心配は、社員の家族達が安東から帰ったとき、特に女性達をソ連兵の危険から護ることが非常に難しいという危機感から発していた。私は、夜、社長ら皆が揃ったとき率直に

その事を話しその対策の必要性を説いた。皆も同様の心配を持ち始めていた。又構内社宅の社員らも同じ危機感を持っていた。協議の結果、各構内社宅の入口階段を煉瓦を積み上げて封鎖することが必要だしその作業の進行に併せてその内部に石炭を投入しようという一石二鳥の提案が出され即時実行に移されることとなった。一戸建の社長公館を除く二階造り三階造りのすべての社宅につき第一棟から着手、各棟の入口を外壁面に添ってドンドン煉瓦を積み上げその作業工程に並行してサイロから取り下ろした石炭を投入しつつ最終的には天井までを封鎖して了うというものであった。社員全員が共同して全棟封鎖完了にこぎつけるのにさして多くの日数を必要としなかった。こうして一階の出入り口を封鎖して後、各棟用に長い木製梯子を造り二階以上の者はその梯子を使って裏の物干台から出入し用済みのときはその都度梯子を物干台へ引き揚げて了うという方式が考え出され作業は終了した。

越冬野菜の準備は平時と異なり、白菜や南瓜は殆んど困難のため、唯、馬鈴薯と甜菜大根のみだがその配達は終了していた。又各社宅への石炭の運搬にも成功、更に構内社宅への石炭搬入と階段入口封鎖の完了でようやくすべての対策が終ろうとしていた。

ソ連兵との接触

九月初め満人傭員に対する退職金支払い以後、日本人社員にも形ばかりの退職金給与を行ない、又全市内社宅への越冬野菜の購入と配達にも成功していたので、社長公館に保管の麻袋入りの社用金の紙幣の残額も社長の言によると略六十万円を残すのみとなっていた。既に疎開中の家族への生活資金兼新京帰還工作資金の安東支店送金手配も終っていたので全社員に対する当面の手当てはほぼ完了していた。

あとは、いつ始るか判らない日本への引揚問題を残すのみ。それ迄は社員各自が自らの努力によって日常生活を支えてゆくことが要請されることとなった。従って高田社長は残余の保有金は引揚の際の必要資金とすると我々三名に告げ、極秘裡の公館の炊事場板の間の小さい地下倉庫に麻袋に入れたまま保管しておこうと云い、之を実行していた。この事実を知らされたのは樋口、北川の両名と私に対してのみで、他には其事実及び金額を完全に秘匿していた。尤も私もそのことを知らされたが、金額の総量を確かめたこともなく況して麻袋のまま炊事場の地下に格納する現場に立会ったわけではない。唯、誠実温厚な社長の言を信じ何の疑いも持たないま

まその処置に安心していた。

ところが後日ここにも異変が起きることになる。羽衣町通りの南側、即ち公館の向い側に建ち並んでいた一戸建住宅が、すべてソ連の将校宿舎として接収される事件が、突然勃発した。それは誠に非情極まるもので、軍の命令として言い渡され、所有者である日本人には有無を云わさぬ立ち退き命令という強制であった。ソ連将校がその夫人らしい女性を伴って突如侵入しては、彼らが生活上必要とする物件を特定して、それらの持出を禁じ、その他の品は所有者の自由意思に任すというけれど、一時間或いは二時間以内に明渡せとの厳命である。余りにも突然、時間を限っての非情な命令なので、動転した所有者はそれこそ一部の金品と衣類と生活必需品のみを持出し得たのみで難民同様に立退かざるを得なかった。十月の下旬か十一月に入って間もなくの出来事だった。それは元第一師団兵営の北側の一戸住宅地帯だったので、将校用宿舎としてねらわれたものらしかった。ピアノ、主たる炊事用具、ベット、応接間セットは、勿論持出禁止である。仮令持出したくても時間も運搬車もなく、又立退先も未定のままとあっては、文字通り着のみ着のまま出て行けと云われるに均しいものであった。文句の持って行き場もない。押入り強盗同然の処置で、唖然とするばかり。近所に住む者として同情を禁じ得ないが、お互いに敗戦国民となれば、唯我慢して全てを運命と諦め、甘受するより外に何らの術はなかった。次ぎつぎと日本人に迫りくる圧迫が、今後も色々な形で現れてくるかも知れない。足許の土がいつぐらつくか判らない。が、先のことを考えても仕方がない。災厄が来たら、その時に考える外はないと覚悟を決めた。

その日から間もない一日、私は公館を出て本社構内を歩いて偶然、瀬戸口技術課長とぱったり出会った。お互いの無事を喜び立ったまま雑談をしていた。その時、本社正門から一人のソ連将校が入って来た。背の高い男で丈の長い外套を着て、その袖にはいくつかの階級章がついていた。その将校は私たちに近附くなり手に持っている金属製品を見せながら盛んに何かを語り始めた。その品はアルミ製らしい長さ約 13cm 幅及高さとともに 5cm 位の角型金属片で、それがなんであるかはさっぱり見當もつかなかった。将校は、しきりにそれがどういうものかを説明し乍ら、何かを求めているらしいことは判ったが、言葉が通じない以上判断のしようがなく、全く困っていた。その時傍らに来ていた一人の社員が、ロシヤ語を解せる日本人が近所に居るから、その人を頼んで来ようかと云う。是非にとすぐ頼みに走って貰っ

た。その通訳の日本人は私より少し年上で、最近接収された住宅群の裏通りから来たらしかった。ソ連の将校は例の金属片を見せ乍ら熱心に何かを話し始め、日本人通訳は一、一諾いていた。話が済んだあと、私たちにその内容を伝えた。相手はソ連の飛行将校で、持参の品は航空機の最後尾の底部にある金属だとのこと。簡単に云えば、人間の尾骶骨のようなもので、離着陸の度に磨り減って減耗したので、之以上放置出来ない状態だから、それを工場で肉盛り加工してくれないかと頼みに来たのだという話であった。技術のことは私は判らないが、瀬戸口技術課長はこれを諒解し、その金属を受取り工作室に入って行った。どれほどか時間が経った後、瀬戸口君は加工完了したその金属片を持って現れた。それはすっかり綺麗に肉盛され、すり傷だらけだったのがピカピカの角棒に変っていた。これを受け取ったソ連将校は、目を輝やかせて満足と𠮟びの表情を示しながら「オーチン、ハラショー、スパシーボ」を連呼し𠮟んで去って行った。私たちは通訳して頂いた人に厚くお礼を云って別れた。後日、この人ととんでもない場所で再会することになるのだが、この時はそんなことは予想だにしなかった。

附近の一戸建て住宅が軒並みソ連軍将校用の宿舎として接収されてから何日か経ち、立退かされた日本人達はどこへ行ったのか。難民同様の困難に直面させられたことに同情を禁じ得なかった。その反面、将校宿舎が近くにあれば、治安上の懸念は多少軽減されるかも知れないとの期待もあったことは否めなかった。

形ばかりの夕食が終り、その日の無事を𠮟びつつ雑談を交わしていたとき、鍵が掛けてあった筈の裏口ドアをあけて三名のソ連兵が入って来た。それは予期しなかった出来事だった。余りにも突然のそれは闖入だった。社長はじめ私たちはテーブルを囲み、ソファーに座ったまま唖然として彼らを眺めていた。三名ともソ連の兵卒だった。時間は夜九時前後で、あたりはもう暗くなっていた。彼らが応接間に侵入してきたとき、社長は立ち上ってテーブルの端に席を移した。三名は私たちと対面する形に並んでソファーに腰を下ろした。乱暴をする様子はなかったが、何を云い出すかと誰もが彼らを凝視していた。唯女性が一人も居ない男ばかりなのが幸運だと感じていた。最初に侵入してきた大きな図体の男が首謀者のようであった。その男が社長の近くに坐わり、他の二名もソファーについたとき、その首謀らしい男は強い口調で「ウオッカ、ウオッカ」と叫んだ。酒を呑ませろと要求していることが判った。社長公館にはなかった筈で、どこか社宅からでも借りて来たのか、間

もなく満州産の白酒が準備され、社長がコップ三個を出して来て、彼らのコップに白酒がなみなみと注がれた。ところが彼らは腰かけたままで、それを呑もうとしない。更に私たち四人のコップも出せと手まねで要求した。我々のコップも白酒で満たされたとき初めてソ連兵三人とも立ち上って乾杯しようと目配ばせした。それに促されて、私らが立ち上ったとき「ウラー」とか何とか言ってソ連兵は三人がいっきに全部を呑みほし、コップを空にして了った。それは本当の乾杯だった。白酒は60°のもので、私らは迚も呑みほすことが出来ない。約一糎分位を呑んだだけで坐ろうとしたが、彼らは「ダワイ、ダワイ」を連呼して全部呑めと催促する。私たちはこのような強い酒を呑んだことがない。「ニエット」と返事をかえし乍ら座って了った。「ダワイ、ダワイ」を繰り返していた彼らも諦めたのか、みな腰を下ろした。私は意外なところでソ連のお国柄を垣間見た思いがしていた。それから更に何か料理を出せと催促する仕草で、盛んに手ぶりを交えながら喋べり始めた。社長が已むを得ず料理の残りやつまみ物を出した。彼らはそれを口にしながら盛んに何かを喋りかけるのだが、チンプンカンプンで全然話が通じないまま相当の時間が過ぎていった。終りに首謀者が「ヤポンスキーマダム」はいないかと云う。私らは問題にせず「ヤポンスキーマダム、ニエット」を繰り返すうちに諦めた三人はおとなしく引き揚げて行った。とんだ闖入者に呆れながら、大事に至らなかったことでほっとし、後を片付けて寝に就いた。

ところが、その翌晩も同じころに又もや三人揃って侵入して来て、同様に酒と料理を要求して悦に入っていた。この晩は誰が持っていたのか小さな日ソ対話集がおかれていた。質問と答の対話形式のものだったので、それを見ては頁のロシヤ語を話すと、相手はその答えの文章を指で示すと■まだるっこい方式の問答を繰り返す内に、稍和やかな雰囲気が出て笑い声まで交じるようになった。その首謀者は白人で、頭にワのつく四字の名の男で、その名前を正確に覚えていたが、今は思い出すことが出来なくなって了った。仮にワラーエフという名にしておこう。このワラーエフ？という首謀者は、モスクワの近所から来たと云い、他の二人はタタール人と判った。ワラーエフは大きな身体にも似ず、割合器用な男で本社の工作室へ侵入して何かの修理をしていたとの話もあった。けれど彼がトイレに行き坐をはづした時、タタール兵はその悪口を云い出し不平を漏らしているのを聞き、民族間に差別的で不協和な本音があることを察知することが出来た。

尚それよりもこのように対面し会談すると、ソ連兵ひとりひとりが素朴な人なつこい性格の持主だと見られるのに、ソ連という国家の組織の一員となり、特にソ連軍という戦争集団に組込まれると、何故あんなにも嫌らわれる悪魔に変貌するのか不思議だった。彼らは近くの接収将校宿舎の炊事当番兵らしいことが判かり、任務がすんでから暇つぶしにやって来たのだとも推測していた。けれど、こんなことが幾晩も続いてはたまらない。それで遠慮せずに「我々にはお酒を買うお金がないので、次から来るときは、お酒も料理も自前で調達して来るよう」に伝えた結果、三日目の晩には、宿舎でちょろまかして来たのか、ウオッカや料理も少し持参しての来訪となった。帰り際には、やはり「ヤポンスキマダーム、ニエット？」を相も変らず繰り返したが、私たちは笑いながら、ニエットニエットと答えて相手にしなかった。こんなことが五晩ほど続き、その応対に困り始めていた頃、彼らの来訪はパッタリと杜絶えた。その理由は解しかねたが、悪魔払いに成功したような思いで、みなほっとしていた。けれどソ連軍占領下の厄災は形を変えて襲って来ることを予期することは不可能だった。

この頃には、もうソ連兵の跳梁跋扈は稍沈静化の傾向に向っていたようだ。ヤポンスキーマダムを口にするソ連兵は他にも多くいただろうことは考えられるが、事実上の被害については街からも日本人特に婦女子が襲われたとの噂は聞かれなくなり、稍愁眉を開くことが出来るようになっていた。しかし、敗戦という事実は、軍人よりも特に北満に展開していた日本の寒村から来た開拓民や地方に住んでいた一般の人々の上に、筆舌に尽くすことの出来ない苦難が重くのしかかる結果となった。避難する途中で、現地人による略奪暴行、果ては殺戮が行われる中を辛うじて運よく南下しつつあった集団を、今度は多数のソ連兵が襲い婦女子に暴行を加えようとした事件を耳にした。このことは噂によるのみで、その場所も時期も詳らかにすることは出来ない。然し或る一団の避難民、その中には多くの若い婦人や少女が含まれていたという。之をソ連兵が襲った。その時、意を決した健気な年配の婦人数名が言わず語らず起ち上り、ソ連兵の要求に応じて人身御供として身を投げ出し犠牲となることにより他の多くの日本の女性を汚辱から救ったと聞く。同じ日本人同志であっても、お互いに縁もゆかりもない、お互いが避難の途中の集団の中で発揮された、これら数名の年配の日本女性の悲しくも貴とい犠牲的献身により、虎口を免れ得た多くの女性は、その生贄の行為によって助けられ無事に故国へ帰り着くこと

を得た筈である。でも、その生還が貴い犠牲の上に達せられたものであることを終生忘れることはなかっただろう。又名も知らぬ多くの日本婦女子の身代りとなった年配の女性達は、たとえ無事に故国へ帰ったとしても、その貴い献身行為の事実を自らが口にすることはなかったであろうと思うと何とも云いようのない切なさを感じると同時に、無名の婦人たちの行動に神を見るような感激を覚え心がふるえるばかりである。

新京にソ連兵の跳梁して暴虐の嵐が吹き荒れていた頃、市中の殆んどの日本女性は戦々恐々その身を守ることに腐心していた。特に夜が正念場であったことは奉天全市の暗闇の半日の例をひくまでもない。南新京駅近くには、早くから将来の発展を予測して本社々屋建設敷地を準備されてあった。又同時に南地域一帯への瓦斯供給を円滑に行うため大きなガスホールダーを設け、その傍らに一棟の出張所が設けられていた。そこには施設の保全と維持管理及本社への連絡のため常時三名の男子社員が勤務していた。彼等はみな独身者で、夜はその出張所に附設の独身寮に泊っていた。場所は南新京駅に近かった。と云っても、この一帯は未開発地帯で、南新京駅でさえ駅とは名ばかり、僅かに上屋とプラットがあるだけで、あたりは一面の荒野のままであった。市内環状電車線路沿いには人家が密集していたが、洪熙街のあたりに来るとただ数棟の家が林間に散在しているのみの閑散とした景色で、遥か彼方にガスホールダーが望見出来るだけだった。ある夜、人里離れたこの出張所さえもが何名かのソ連兵に襲われるという珍事が発生した。

それがいつだったか思い出しようもないが、まだ市内が騒然としている頃であった。そのときは三名の男子独身社員が勤務を終え揃って一室でぐっすり寝付いた真夜中突然入口を破る音に目覚めるともう何名かのソ連兵が枕許に立っていた。このころ市中の女性は殆んど髪を切るか丸坊主となり男装していたので、そのことはソ連兵は承知しているらしかった。侵入して枕許に起つなりすぐ三名の社員の夜具を剥ぎ胸元に太い毛だらけの手をつっこんで胸許の乳あたりをまさぐった。ところが合憎のことにいづれも胸はぺしゃんこで乳がふくれていない。三人ともが男だと判ると奴等は案に相違してがっかりした様子で無言のまま靴音も荒く立去った。その翌日、本社へ来てその内の一人で福島出身の深沢敏■君から直接そのときの珍事談を聞き飽くなき襲撃に腹が立つやらあきれるやらで無事だったのが何よりと笑い話に終る飛んだ幕切れの一日だった。

もう一つ珍𡸁劇ともいえる事件があった。図らずも私が登場人物の一人となった。まだソ連兵が出没して会社の備品が盗み去られる事件が続発していた頃だった。社長の意見で、「中国への接収財産の引渡完了する迄はその保全に努める責任がある」ことから、社員総がかりで残存する器具備品等を社長公館の一室へ移したことがあったが、その前後の出来事だった。本社の正門を入いるとすぐ右手に車庫にはいつも乗用車一台とトラック一台が格納されていた。その乗用車は知らない内にとっくに消えて失くなっていた。恐らくソ連軍に接収されたのだろう。まだトラックはあったが、片側のタイヤが盗まれて傾いた車体は哀れな残骸をさらしていた。察するに、各社宅へ石炭を配ばり終えたあとの被害だと推測された。とすれば十一月中旬、安東から家族達が無事新京へ到着するより以前のことになる。この車庫の左端には幅一間位の仕切られた部屋があった。それは車輛用の諸道具を入れる場所だった。その入口の扉がそのとき半開きの状態で、中をすっかり見透かすことができた。その内部はがらん洞と化して、何も無くなっていた。あまりに変り果てた見すぼらしさに、ふと中を覗くと天井近くに何本かの針金がわたしてあって、この狭い一室は何かを燻すべたように天井も側壁も一面に煤で真黒になっていた。そのころ附近の一戸建て住宅が全部ソ連軍将校の宿舎として接収されていたので、ひょっとすると、その食事当番の従卒の兵たちがこの狭い場所を利用して、羊の肉などの燻製を作っていたのかも知れないと想像することが出来た。

もう一つの事件がその後にあった。或る時、社内を歩いていると、一人の満人が近づいてきて「北川さん」の名を口にし、面接を求めているらしかったので、私は北川さんなら社長公館に居ると答えてその場を立ち去った。その後、満人は社長公館へ向ったようだった。私が公館へ戻ってその話をすると北川君は答えた。数日前にその満人が「トラックのタイヤが一本はずれかかっている。どうせソ連兵に盗まれるなら自分に売ってくれ」と云うので十数円を受取って売ることにしたと、何日か前の話をしたあと、その満人が今日再び現れてタイヤをはづして持ち帰る途中で、運の悪いことにそのタイヤはづしの張本人らしいソ連兵に見つかって強奪されて了ったから金を返せと云って来た。然し、盗られたことについては当方の責任ではないと取合はなかったとの話だった。

その満人は会社の元社員だったかも知れない。ソ連兵に横取りされるとは運の悪いことと同情したが、日本人も大勢が被害を受けている時機であり、お互いが忍ば

ねばならないこととその場は割り切っていた。

ところがその翌日、社内で又偶然その満人に出会った。満人は片言の日本語交りで、タイヤをソ連兵に横取りされて了った。支払ったお金を返してほしい。どうか私から北川さんに頼んでくれないかという。それは必死の願いだった。わずか十数円と雖も彼等には、それは大金だろうし、大事な生活資金でもある。固もと黙って持去られても仕方のない時代である。それをわざわざ断ってお金を支払うほどの正直な人柄に心を打たれたので、私は公館にとってかえし北川君にその事情を話した。最初は軽く受け流ていた同君も尤もの事と理解して、十数円を渡してくれたので元の場所で待っていた満人にその金を渡した。満人は満面に𠮟びを浮べて、何度も「謝々」を繰り返し乍ら、足許も軽くその場を立ち去って行った。私はその後ろ姿を見送り乍ら、被害を受ける弱い立場にある人の𠮟ぶ様子を見て、自分が救われたような思いで満足を感じていた。

家族の帰京

十一月に入ったというのにさして気温の下降が気にならなかったのは、事実温かだったか我々の神経が緊張して体温が上昇していたのだろうか。皮肉にも新京避難の際は、数日間の激げしい長雨で全員がずぶ濡れなのに加え、生命の食糧さえ腐って駄目となる悲惨さは今では思い出すさえ、その不運さに呆れるばかりである。しかし、あまりの惨状に予定されていた北鮮鎮南浦行は無理と判断して、安東で強行下車したことが、却てその後の幸運を齎す結果となった。あれから以後、雨は一滴も降らず、気温までが下降を遅らせて天の恵みを与えてくれたのかも知れないと回想する此頃である。

安東に避難していた新京本社社員及び家族たちが、新京駅に帰還したのは十一月中頃であった。それはあまりにも突然の朗報であった。到着前にはなんの情報もなかった。社長はじめ在京社員は一様に驚き𠮟びながら駅へ向おうとしたときは、既に疎開した人々が続々と本社へ到着しつつあった。そして、互いの無事を𠮟び合い、抱き合って涙を流さんばかりの嬉しい情景が展開された。

私も正子が廸子、武彦、玲子の三人の子を伴って無事帰って来たのを見て、よく難関を切り抜けてくれたものと、三か月ぶりの再会を果し得たことを𠮟び、言葉を失なっていた。聞けば、安東で仕立てられた列車にはソ連のゲーペーウーが二名、

同乗警備してくれたので、途中災厄は一切起らずに全員元気に新京へ到着することが出来たとの話だ。それは社長の期待通りに、安東支店長が各方面にはたらきかけた努力の結果であると感謝すると同時に、又北沢要君の連絡使命達成の成果だと高く評価していた。この困難な状況下で、こんなにもすべて期待通りの成功を収め得たことは正に感激だった。

夫々の家族たちは、間もなく三々五々自分の社宅へ引揚げて行き、構内は又元の静けさを取り戻しつつあった。社長夫人やお嬢さんも無事帰還されたので、私達三名は公館から出て、すぐ北隣の四戸建アパートに移ることになった。樋口君は家族と共に元の住宅である公館前四戸建の一階へ、北川君と私の撫松路組はその二階へ隣り合って住むこととなった。私ら家族五名が入居することになった二階東側は、元渡辺誠君の社宅であった。渡辺君は応召中で未帰還だった。その渡辺夫人は子供一人連れての帰還だったので、私たちはそこへ同居することとなった。渡辺夫人とお子さんは、元の古巣へ帰ったわけだが、私たち五名は難民同様に渡辺方に同居することとなり、嘸かし不満もあったろうが、北川君と共に私ら撫松路組みの通勤は困難との判断から、かく決定されたので、それを拒むことが出来ずに、社命として我慢してくれたのだと感謝している。

私が入居の下の一階は、瓦斯製造所長川原君の旧居であった。前述した通り既に入口階段は煉瓦で封鎖してあったので、二階以上はみな物干場へ昇り、終ったあとはその都度、梯子を引き上げて家に入ることによりソ連兵の侵入を防いでいた。渡辺夫人の旧居は防空暗幕などは盗られていたが、世帯道具は全部残っていて余り荒されていなかった。相談の末、渡辺夫人はお子さんと北側の八畳の座敷と四畳半の二部屋、私たちは南側六畳と四畳半を使うこととなり、久しぶりに親子五名が一緒に暮すことになった。正子も子供たちも無事に帰京出来たことでホッとしていたが、わずかの衣類を持つ難民同様であることには変りはなかった。渡辺さんから最小限度の布団や鍋などを貸して頂いての取りあえず一夜を過した。

その翌日、正子や子供三人を伴い、みな空のルックサックを背負って撫松路に向った。よくも危険を侵し、而も女の子まで連れて軽率だったと回想するが、市中も平静に復し人の往来もあり、心配はなかろうと高をくくっていたが、些か無神経だったようでもあった。遠い道程を当然のように、子供たちも親について歩いた。洪熙街から満映にかかり春光小学校の手前で、なぜかふと初めての裏通りへ廻り道した。

すると草いっぱいの広い空き地に屋台店があり、満人が煎餅（チェンピン）を焼いていた。こんな辺鄙などころで商売になるのかなと不思議に思いながらも、大きな鉄板の上で焼かれている煎餅の香に吸い寄せられるように屋台の前に立停まっていた。焼かれていたのは高粱を材料としたものだった。玲子が満三才、武彦五才、姉の廸子でさえ八才で、お腹がすいているだろうによく歩いてきたと哀れになり、煎餅を買って食べさせた。子供らの嬉しそうに食べる姿を眺めつつ、私はつかの間の幸せをかみしめていた。お腹がすいていたせいか、その高粱の煎餅の美味しかった味が、今に忘れられない記憶として残っている。

やがて撫松路の自宅前へ到着した。柵をあけて中に入り玄関前に廻ったとき、この時も畑の一番遠い左端に、一人の女性の屈んでいる後ろ姿が目に入った。その辺りは牛蒡の種を蒔いたところであった。素人造りでも細い牛蒡でも出来たのかなと不思議だったが、私たちに気付く気配はなかった。玄関前で、ふと鶏小屋を見ると、入り口前に鶏の白骨がぺちゃんこに地面に横たわっていた。自分の小屋を忘れず、この辺りを飢えつつさまよっている白色レグホンの姿が目に浮かんで哀れを誘った。

玄関の戸を開けて中に入る。三か月前帰った時とは少し様子が違っていた。何人もの履物が脱いである。不安と不審を抱きながら框（カマチ）を上がり、広い玄関の板の廊下から応接間を覗くと、なんと年配の夫婦らしい男女とその子供二、三人がこちらを見ているではないか。瞬間無断侵入者とふと咎めるように「どうしてここに居られるのか」と聞いた。主人らしい人は申訳なさそうに「組長さんから此処が空いているから入りなさいと云われて、ここに入らせて貰いました」と恐縮しながらの答が返って来た。その瞬間、私は何も云えなかった。そうだ、お互いが難民なのだ。私はこの家を捨てて立退いた身で、今更気の毒な人達に文句が云えるのか。お互いが助け合う時ではないのかと、自問自答しつつ「そうですか、どうぞご自由に使って下さい」と返事をしてから奥の部屋に向った。正子は流石に子供達の衣類其他必要なものを小さなルックに詰め込んだあと、応接間の後ろの三畳部屋の床下に隠してあった私のモーニングや武彦の産着、自らの晴れ着などを取り出してきた。

私は驚いていた。八月十二日夜避難の連絡をうけてから後、僅かの時間に炒り米を作り玉蜀黍を採り入れて焼き、衣類を用意するだけでなく、万一の場合に備えて畳を上げて床下へ大事なものを蔵めていたとはと、今更ながらその周到な気くばり

に感激しつつそれらを二人の大きなルックに分けて詰め込んだ。其他の世帯道具は最小限にせざるを得ない。私は更に応接間の本棚から再び数冊の書籍やノートを詰め込んだのでもうルックサックは満杯だった。台所の押入れに、以前大町から頂いた中国のどこかの大きな碑の石摺りの四枚は残念ながらそのままにしておいた。数々の記念写真はまとめてどれかのルックに詰めた。明るい内に遠い道程を子供らを連れて帰らねばならないと、心を残し乍ら各自に荷物を背負わせた。廸子は学用品などを大切に詰めていた。私自身は大きくなったルックを背にして皆を伴って撫松路社宅を後にした。帰途は撫松路の電車の終点から線路沿いの大通りを真直ぐ北へ、洪熙街から興安大街を羽衣町へと往復四里の行程を歩き通して、構内社宅へと無事に辿りついた時は、もう夕方だった。安東では給食の握り飯がなくなった後は、高粱の粥か薩摩芋などまこと可哀そうな日暮しだったという。それなのに帰京直後に遠い道程を親の云うまま、よくぞ歩き通してくれたとその過酷さを責めつつも、是非とも今の内にやり遂げておかねばとの焦せりから無理を承知で連れて行ったが、嫌な顔もせず涙一つこぼさず、子供なりに大きな仕事をやり遂げてくれたことが嬉しくて堪らなかった。子供らも幼いなりに敗戦国民として親の気持が言わず語らずに通じて、それなりに覚悟していてくれたものと思っている。是非今やっておかねばとの一心から、ソ連兵のいたであろう市中を歩き通し、途中何ら危害を受けることなく無事に帰りつくことが出来たことをこの上ない幸運と感じ、心の中で合掌するばかりだった。従来のようにトラックで荷物を運ぶことが出来れば、夜具その他も全部運びたいのだが、それは叶わぬ願いであった。身一つで持つだけでは、唯一枚の布団さえ持ち帰ることが出来ず歯がゆさを嘆くばかり。何ともやる瀬ないくやしさが残っても諦めるより他はなかった。そして、家族には遂にこれが撫松路の自宅へ帰り得た最後の機会となった。今回の強行軍が、子供達にも何らかの形で苦しい思い出の種となることだろう。人生を生き抜く上での心の糧として刻み込まれることを願うより外はなかった。

何日か経ち新しい生活が軌道に乗りつつ、どの社宅でも活気が蘇えり社員の顔に明るさが戻ってきた頃、現場の人たちから、冬に備えて石炭節約のため、構内社宅の暖房施設の代りに炊事用竈兼用暖房設備の提案がなされ、此の名案は即時実施に移された。古式の竈やガス設備はあっても、ガス供給がない今は使用不可能であり、ボイラー式暖房も石炭の消費の無駄が大きいとの懸念が、新しい提案となったので

ある。私たちの宅にも間もなく多くの人の応援で工場から沢山の耐火煉瓦やセメントが持ち込まれ、四つの部屋の中央の柱の傍、四畳半の間の隅の畳の上に直かに耐火煉瓦が敷き並べられ、見る見る内に竈が造られ、その立ち上り煙突が暖房の役目を果すように工夫され、ブリキ造りの排気施設まで工作係の手で間もなく取付けられて終了した。

全部の社宅に同じようなものが完成する迄には数日を要した。竈で煮炊きする時間以外は薬罐をかけておけば、チンチンと常に湯が沸き、耐火煉瓦のぬくもりと共に室内暖房の役目を果すというもの、その上少量の石炭が効率よく利用される利点があり、鵜木栄君はじめ現場の人達の智慧に脱帽する思いで、感激するばかりだった。この新方式により、この一冬を凍えることなく暮らすことが出来た上、階段に放り込まれた石炭を充分に余して越冬出来たのは、正にそのお蔭だった。

私は社長公館から構内社宅に移ってから、家族達にせめてものことに久し振りに白米を食べさせたいものと、豫て買っておいた米袋を正子に渡しておいた。正子が焚いたおいしそうな真白の御飯を食べかけて、びっくり仰天。なんとそれは白米とまどうばかりの白い石を混ぜたお米だった。パールバックの『大地』にも同じようなことが書いてあったと、正子が云う。でも子供たちは長い間味わうことの出来ない白いご飯だ。みなが一口一口注意して白い砂を取り出して食べていた。内地でもご飯の中に、時たま黒い砂が混じった御飯を食べることはあっても、それは偶然に混入したものだ。このように、わざと白米と見分けのつかない白い砕石を混ぜるという手の込んだ悪徳商法は、中国商人の常套手段なのかなと、まんまと乗せられた迂闊さが悔やまれた。これではソ連人を虚言（ウソ）つきと罵しる中国人も亦信用できないことになる。他人を騙してでも己れの生きる術を探らねばない性来の智慧が五千年の民族の伝統として、今その一端を垣間見せたのかも知れぬ。頼るべき政府も當てに出来ず、いつの時代でも己れ独りが混乱の世を切り抜けねば生きて行けない大陸の民衆の哀れさも忍ばれて、吐き出した幾つかの白い石を眺めながら考えていた。

以後は食事の度にお米と砕石とを選り分けるのが日課となった。選り分けながら、このような白い石がこの大陸のどこにあるのか、黄色い大地と黒い石炭しか見てない私達はそれが不思議だった。曽つて昭和十五年奉天在勤のとき、或る日曜日に数人の若い社員らと「将軍塚」という駅名の渾河沿いの名跡へ遊んだことがあった。

名ばかりの駅で降車してしばらく歩くと、黄色に濁った流れの渾河畔に出た。さして河幅は広くなかったが、水量は豊富でゆったり流れていた。清流を見つづけてきた私には、その河は異様なものとして目に写った。河岸にまばらな木立があり、林間に白くて丸いドームが見えた。その直径も高さも五米か六米位、内部は漆喰で一面に白く塗られ、丸い天井には星が、又、東、西、南、北には四神の青龍、白虎、朱雀、玄武が描かれていた。誰か権力者を葬る工事が途中で中断されたようであった。誰かが張作霧の廟ではなかろうかと云ったが、明かではなかった。そのドームと細路との間には、中国風の大きな石造りの武人や獅子のような獣の石彫りがひっくり返ったままになっていた。四つか五つかのその石彫りは白い大理石のようだった。満州へ来てから自然の白い石の塊まりを見たのは之以外にない。白い米粒のような砕石がどこで用意されたか不可解だったが、その謎は解けぬままに終った。

麻袋入り六十万円に関する事件

私たちの乏しい日常がすすみ出したとき、今度は社長公館で異変が起った。それも全く突然に、ある日ソ連軍将校が一人の女性と従卒の兵とを伴れて勝手口から侵入して、暫らく各部屋を下見した後、何も云わずに出て行ったという話だ。それはソ連軍将校による一戸建て住宅接収の下見かも知れなかった。家族が帰って来たばかりなのにと、社長は驚きと困惑で戸惑っていた。万一接収と決まれば、余裕の与えられない。社長の一番の心配は床下の麻袋入りの六十万円の処置であった。接収と定まった場合、床下から麻袋を取り出している暇はない。社長公館が危険とあれば、他の社員社宅でも絶対に安全な場所はどこにも見当らない。構内社宅でも、いつ中国側から明渡しを云われるか判らない。思い余った社長はすぐ満鉄本社に向った。満鉄本社はソ連占領軍に接収されていたが、大きな建物のどこかに安全な保管場所がなかろうかと相談に行ったのだった。当時、満鉄でも各部課金庫は全部接収されていた。けれど唯一つの地下金庫だけが気付かれぬまま接収を免れていた。「そこなら安全かも知れない」との返事があった。溺れる者は藁をも掴むとの譬にある通り、社長は麻袋の保管を依頼することを決意し帰宅するなり、北川経理課長にその旨を伝えた。経理課長も他に最善策は考えられなかった。その結果、夜更けてから大八車かに麻袋を積み、何人かで満鉄の地下金庫迄運び入れて虎口を逃れ得た思いで帰社した。高田社長もこれでひとまづ安心と胸をなでおろした。

人の一生は、いつの場合でも、すべてが一個人の思いままになるものでないことは誰もが知っている。天変地異以外は、凡そ一定の法則とリズムで動いていて、たとえ自己の自由意思を超えるものであっても、それが神の摂理、世の秩序に従ったものであると観じた場合には、何人も之を納得して天命と受け容れて来た筈だ。ところが、他国の軍隊の占領下にある場合、被占領下の土地にいる人間は、その占領者の意思がどこにあり、どんな意図によって支配されるのか、さっぱり予測がつかないだけに、常に不安に曝され落着いた気持でいることができないのが通例だ。

それでも占領軍が勝れた一定方針を持ち、よく統率力が発揮され占領軍の末端までもが一体となって、其の任務が行われる場合は、被占領の国民に及ぼす影響は、その大小に拘らず整然と占領使命が遂行されてゆくので、仮りに夫れが一方の不利益を伴うものであっても、自制し我慢することによって占領の目的が達成されるものと云える。

けれどソ連軍の場合は、その占領目的がどこにあるのか、恐らくその首脳でさえ明確な目的と意識を持たずに侵入してみたら占領が成り立って了ったというようなことで、はっきりしないまま居座って了っている。極端に云うならば、居直り強盗の親分の指揮によってその子分が動き、而もその親分子分の関係にしてからが急場の寄り合い世帯とあっては、烏合の勢力同然で上からの命令が真直ぐ下に届かない、又届いたとしても、子分は聞いたふりして勝手に動き、武力を背景にしてその欲望のままに仕たい放題やりたい放題の態たらくでは、こちらはなんとも全くしようがない。というような塩梅で、ソ連の方は強大国の威力を見せつけつつ、完全に全土を支配して悦に入っていたのだろうが、占領下におかれた敗戦国日本の軍人は固より、一般民間人こそ迷惑以上に精神的物質的苦悩と損害は大きいものであった。

社長公館では万一の場合に備えて、その日の内に接収にも即時対応の準備と心構えが完了していた。ところが二日経っても三日経っても何の音沙汰がない。結局それは梨の礫となり、結果から考えれば大騒ぎする必要もなかったことになって了い、接収のことは鳧がついた形となった。裕然と構えていた方が良かったことになったのだが、相手がソ連とあれば、何人と雖もそうは行かなかっただろうし、この事が原因で又第二、第三の事件に振りまわされる結果になろうとは誰も予想だに出来なかった。

それから何日経ったろうか、みなが一安心してそのことを忘れかけていた頃に、

社長方へ満鉄から突然に連絡が入り、問題地下金庫もソ連の気附くところとなり、麻袋入りのお金も接収されて了ったとの連絡があった。之を知った社長は、茫然として了った。結果から云えば、あの時、周章てることなくそのままにしておけば、翌二十一年二月末にはソ連は満州から撤退して了い、社長公館はそのままだったので、問題がなかったのにとも後悔された。何はともあれ、不運にも最後の「虎の子」を奪われて了った。今はソ連に交渉する外ないと、社長は北川君を伴ってソ連軍司令部へ向った。

司令部で社長は満鉄本社地下金庫に保管委託した麻袋入り六十万円は、満鉄本社の保有金でなく満州ガス会社の金であるから返還してほしいと申入をした。相手側の返事は、それなれば、その証拠となる帳簿を示せという。ソ連が本気か否か不明のままに証拠帳簿を作らされる破目となり、北川君は帰社するや残額が六十万円となるよう過去に遡り、記録計算をでっち上げた帳簿を提出したのだが、その帳簿を受取ったままで、結局何の返事もないまますべてが徒労となり、とんだ社長公接収騒ぎのお蔭で、最後の大金があっけなく泡と化して消えて了った。そして引揚に際して社員に分配をとの社長の配慮も、不幸な形で分解して了った。

ソ連兵との度重なる遭遇

十二月に入り流石に気温も下降して、どの社宅でも女性や子供が外に姿を見せることは殆んどなかった。家では急造の耐火煉瓦造りの窯では四六時中石炭をちょろちょろと赤い焔を出し、上の薬罐からはチンチンと湯気を上げ、室内を温める効果を果していた。本来の玄関の扉をあければ、二階の階段まで石炭で満ちていたし、馬鈴薯、白米や甜菜大根も沢山用意されていた。いつもの師走とは違い、正月を迎える準備など、とても考えられなかったが、無事に越冬することが出来れば、明るい情報が得られるだろうと、誰しもが事態の好転を願っていた。しかし、此頃はまだ何ら明るい兆しもないままの淋しい師走であった。

新京本社では、最後の「虎の子」の消滅で失望で沈んでいる頃、奉天支社からの明るい情報がとどき、暗い話ばかりの中に希望の灯が点もされた思いであった。それは、奉天支社の大町さんらが元満人社員らと協同して公社を組織して、一階の食堂で「饅頭」と「握りずし」を販売し出したところ、之が評判となり連日大賑いで、奉天支社内には占領下と思えない程の活気に満ち満ちていると伝えられた。日本人

だけの経営では成り立たないが、満人が代表、日本人が副という形なので危険はない。而も平安広場という繁華街も近いところでの開店とあれば、まづ奉天社員は之を軸として､何とかしてこの危機を乗り越えることが出来るかもしれないと𠮟んだ。しかし、夫以外のハルビン、錦州、大連からは何の情報もなく、依然として不安は残っていた。又奉天の商売繁昌の蔭で、九月以降の日本人兵籍者狩りの其後も気がかりであった。

冬とは云えいいお天氣の一日だった。相変らず協和服を着て外出した。なぜそんなところへ行ったかその理由が思い出せない。興安大路の独身寮の様子を見るためでもない。大街との交叉点から反対の西の方、連京線の鉄橋辺りまで歩いたような気もするが、この辺りでは買い物をする店もなく、又その必要もない。私は自宅へ帰るべく、興安大街の交叉点から左側の歩道を大勢の日本人に交って北へ向って歩いていた。此頃は殆んどの日本人が電車を利用することなく、みな歩いて用を達していた。なぜか人並みが陸続と続いて、私の前にも多くの日本人が歩道を行き、後方からも沢山の人々が北へ向っていた。交叉点から北へ七、八十米進んだとき、左側が空き地でその次に人家が一軒あるのを見ていた。丁度空き地の中ほどまで歩いて来たとき、前の家の裏蔭から中背のソ連兵が出て来たのが目に入った。私とソ連兵との距離は約八米位。私はオヤと思ってそちらに視線を移した途端、ソ連兵と目が合って了った｡ソ連兵を右手を前に掌を上に指を屈し乍ら西欧風の手招きをした。逆らえばどうなるか、大勢が歩いている、まさか射つようなことはあるまい。手招きを無視して前進しようと思ったが、その日私は懐中無一物で、何も盗られる心配はなかった。エイ行けと咄嗟に判断して、私は輔道からはずれて空き地に入りソ連兵の前に立った。こちらへ来いと家の裏まで連れ込まれるや、すぐ服のポケットあちらこちら全部に手を突込まれた。それは決して気持ちのいいものではなかった。ソ連兵はピストルを持っていた。私は両手を高く揚げて、云うままになるより外はなかった。散々に調べられたが、何一つ盗られるものは持っていなかった。案に相違したのか、ソ連兵は舌打ちして私に行けと合図をした。私は馬鹿目、お前らの手にかかるかとばかり、すぐ空き地を出て輔道の人並みにまぎれて自宅へ急いだ。合図をして梯子を下ろして貰って家に入り、此の日の出来事を話して無事を𠮟んでいた。九月ごろは大勢の社員も、同じような破目に陥入り金品を強奪されたが、此のころは余り耳にすることがなかった。ホルドアップはこれで二回目の経験となった

わけだが、次から目を合はさないように注意するようにと、心掛けるべく自戒していた。

こんなことがあって暫く後、順天街の社宅で社員が射殺されたとの情報があった。ソ連兵が突然社宅の階段を昇ってきた。明かに二階を襲ふ目的であった。二階には安東から無事に帰った奥さんがいた。社員はソ連兵に気づき危険を察知して両手を拡げて階段の上部に立ち塞がる姿勢をとった。その直後無暴にもソ連兵がピストルを発射したので、その社員は胸を射たれて即死した。ソ連兵はこれを見て泡を喰って走り去ったという痛ましい事件が起きて了った。粗暴卑劣なソ連兵の蛮行によりこのような被害を受けるとは如何にも悔しい限りである。

この事件があってから何日か経った日の午後、私は是非とも倉田豊君へ連絡の必要に迫られて、安達街へ向っていた。出発したのは午後二時を過ぎていたようだ。ホールドアップ事件があった後なので、充分注意し乍ら興安大街を南下、興安大路との交叉点を過ぎ、同君の宅に到着、奨められるままに座敷に上り、用件をすました。すぐ辞去する積りが老人も居られて、つい長話となり半時間以上も話し込んで了っていた。まだ時間をそう遅くはないが、早く帰らねばと考え同家を辞し、電車通りへ出てからふと嫌な予感がして不気味さを感じていた。全く人通りが杜絶えている。歩いているのは私一人だけである。その上あたりは薄暗くなりかけているではないか。余程引返して倉田君方に泊めて頂こうかとも考えたが、同家は広い家でない。ご迷惑をかけては気の毒だ。急いで歩けば暗くなるまでには帰り着くことが出来ると考え直し北に向って歩いた。歩いているのは私一人だ。もう電車も全然動いていなかった。電車軌道上を急ぎ足で進んだとき、前方五十米程の右側の旧満州国軍根拠地の広くもない練兵場の木蔭に、数名のソ連兵が屯ろして私に注目しているのに気付いた。その瞬間、失敗ったと感じたが、今更引返しては却って危険と考え何気ない振りを装いつつ、敢て歩を速めて十米位手前まで進んだとき、二名のソ連兵がパタバタと追って来た。やられると思い、私はすぐ両手を上げ突立っていた。それからはもうどうしようもないので、ソ連兵のするままにするより外なかった。二名は私の服の両ポケット、胸のポケットから内ポケットに争うように手をつっ込み、つまみ付財布や手帳、ハンカチ、ちり紙までをアッという間に盗られていた。私はまだ両手を上げたままだった。そして一人が私の目の前で小さな手帳を大きな左手に持ち右手でペラペラと頁を繰っているのをじっと見ていた。二十台半ばの若

造だった。奴等は泥棒以外の何物でもないと私はふんでいた。人間ここまで来ると割合度胸が坐るものである。財布には小銭が少し入っていたので、それは諦めていた。私はもう平静をとり戻していた。それで手帳を繰り終ったソ連兵に右手を差出して返してくれとの意思表示をした。手帳にはメモしか書いてないと思ったのか、手帳は私に戻された。案外少ない収穫にあきれたかも知れないが、二人は元の場所へ戻り始めたので、私はもう用済みと考え、その場をはなれ歩き出し、交叉点に向って急いだ。手帳には十円札が一枚四つに折って裏表紙のところにはさんであったのを思い出し、歩きながら調べるとそのまま盗られずにあった。更に上着の左襟裏の小さいポケットとずぼんの右前の小ポケットにも一枚宛十円札が小さく折って入れてあったのも無事だったことを確かめてホッとしていた。結局、盗られたのは財布の小銭だけで、全部で五円以下だった。

やれやれ危いところだったが、小難ですんだのを乭びつつ興安大街の交叉点の手前まで同じように電車の軌道上を歩いていた。その時交叉点を渡り切った三十米先にソ連兵の歩哨が銃を持って立っているのが見えた。そこはソ連軍司令官の駐屯する接収住宅前であった。その場所で以前、日本人が背広の上着を盗られたという話を思い出した。これはいかんと危険を感じた私は、帰宅することを諦らめて咄嗟に興安大路の独身寮に泊まることに決めた。それで交叉点に入るとすぐ歩を早やめて急に右折した。そして歩哨兵の姿が街角の家の蔭にかくれた瞬間全速力で走った。右へ曲がろうとしたとき前方の歩哨兵が大きな声で叫んだのを耳にしたが、私は必死だった。歩哨兵は叫んだだけで、私を追って来る気配がなかった。任務上歩哨の位置を離れることが出来なかったのかも知れない。それこそ一目散に走り息を切らし乍ら独身寮の入口に着いたが、驚いたことに入口は板を打ちつけて、封鎖してあった。そのことを予想していなかった私が迂闊だった。仕方がない、裏口へ廻れば何とかなると裏通りへ、そして裏門に立った。が裏門もしっかりと閉ぢられていた。門と中の部屋の距離は二米程だが私は門の外である。そして時間はさほど遅くない筈まだ夕刻前だが、師走月で薄暗くなっていた。私は辿りついて安心する反面、くぐり門さえ堅く閉ぢられているのを見て焦った。「岡村君！岡村君！」と何度も大きな声でその部屋の人の名を叫んだ。若しその部屋の人が居なかったらどうしよう、聞えなかったらどうと、あとのことを考える心の余裕はなくなっていた。大きく叫んでは、その反応を耳を澄まして聞きとろうとしていた。その時、寮の扉が開く音

がして足音が近づいて来た。助かった！と私はホッとしていた。内から「誰？」と聞く声がした。外から叫んだのが私だと判ってくぐり戸は開けられた。私は内側に入ることが出来て、初めて助かったと胸をなで下していた。岡村君の部屋に落ついてからこれまでの経緯を話して泊めてくれるよう頼んだ。

何十年も経った後、私はどこであったのか、狭い部屋で貸してもらった布団にくるまって眠っている自分を思い出していた。 そして明け方近く、その部屋の人と頭がひっつくような位置で寝ている己れの吐く息で、口許の布団のあて裂れが白く凍っているのを気にしていた。ここではもう石炭がないのかと疑問を感じながらも、再び眠りこけたことなどが幻のように浮びつ消えつしていた。それは現実にあった筈だと思い返しても、それがどこであったのかどうしても頭に浮んで来なかった。だが、新京で他人の部屋で泊って眠ったのはこの時以外にはなかったとの結論から、そのことは岡村君の部屋に泊めて貰った時のことに違いないと思うようになった。独身寮は集中暖房なので、随分石炭の節約に配慮し、一日僅かな時間しか焚かなかったのでないかと思われる。

それにしても随分危い橋を渡って来たものだと思い出しては、今更ながら驚いている。歩哨の立っていたところはソ連極東軍司令官の接収邸宅であり、又独身寮の裏一帯は以前関東軍将校の住居の筈だから、敗戦でソ連進駐後は、この独身寮の裏一帯は師団兵営にも近い関係からも、当然ソ連軍将校に接収され、その宿舎となっていた筈だ。そんなところで夕闇迫るころ大声を出して叫び、万一岡村君が門を開けてくれなかったらどうなっていただろうか。又歩哨に大声で咎められながら必死で走って逃げたが、裏へ廻ったその通りは歩哨の位置から千米とは離れていなかったし、若しソ連の歩哨が少し移動して、この通りを見透かしていたら、或いはとんでもないことになったかも知れないと思い出しては肝を冷やしている。知らぬが仏という言葉がある。又気付かずにいる者は、蛇にも驚かないという言葉があるが、今になって背筋が凍る思いがする此ころである。無事に終ったのは、全く運がよかったからとしか云いようがない。そうでなければ殺されていたかもしれない。

少年社員に関する記憶

悲喜交々の日々がつづく中で、時間だけは何事もないかのように同じように刻ま

れ過ぎていた。三人の子供もどうやら元氣を取り戻していた。食べるものが乏しいながら家族が一緒に起居できるのが、何事にも代えることの出来ない安心と喜びであった。新聞もラヂオもないので情報は殆んど入らず、日本の其後のことや大陸の様子も判らないまま師走の月は終っていた。

明くれば昭和二十一年の元旦だったが、お正月らしい風景はどこにもなく、構内社宅はひっそりして殆んど外出する人影はなかった。どの家も正月飾りひとつない普段のままのうらぶれた淋しさばかりが目立つ新春だった。十一月中旬新京へ帰って以来、三人の子供らは殆んど二階の室内暮しのままで地上に降りることは絶えてなかった。幸いなことにソ連兵も社内に姿を見せることは少なくなり、それが何よりのよろこびであった。流石に寒気は相当の厳しさとなり、大地は凍てつき木々も葉を落として、灰色の梢だけが空につきささっていた。常緑の垣根の残り葉もみな薄よごれて黒々として縮んでいた。

ソ連軍は占領以来、旧満州国内の機械施設などは殆んど貨車で運び去って行ったという噂が早くから拡まっていた。恐らく豆満江だろうか、豊満ダムの電気機器などもはづして奪い去ったという。何だかソ連国内の寒々とした公共施設の不足さと盗棒軍団の実態を見た思いがしていた。

東満のことを云えば忘れていたことが一つある。昭和二十年春三月、内地から唯一人の中卒割当採用の少年が新京駅に着き、出迎えたことがあった。この中卒は鹿児島商業の卒業生だったと記憶していたが、帰国後、斯友会（社員会）で鹿児島県在住者に調査依頼しておいたのに対して該当者なしの返事がもたらされて、今も判然としない。恐らく十九才だっただろう少年が、新京に着任して間もない六月頃だったか、学徒動員で東寧に行くこととなり、切角の会社採用も又無駄に終ってがっかりしていた。ところが東寧でどんな仕事に従事しているのかと気になったままの遂の敗戦である。満州事情も知らない少年のこと、而も遠く離れた東満でさぞかし困っているだろう。内地での動員であれば、郷里へ帰還することは容易な筈と、その無事を祈る内、私も新京の混乱で、いつとなくその事は忘れていた。それが確か十月末か十一月の上旬頃、その少年社員がひょっこり新京本社の私の前に現れた。私は驚くやら無事を喜ぶやらで、早速独身寮へ入ることを指示していたように思い出す。東寧から新京迄は直線距離にしても五〇〇粁、実際はそれ以上の道程を恐らくお金も持たずに歩き通して来たに違いなかろう。その精神力、執念と体力とに圧倒され

る思いだった。東満では兵隊は民衆に襲撃され、多数が殺されたとの噂があった。その長い距離をどうして無事に帰れたのかと尋ねたところ、田舎では満人が至極親切で、飢えていると知れば、食べるものも与えてくれたり、泊めて励ましてくれたとのこと。ここにも本来の人間の温かい人情の一面を知る思いがして感激したことだった。

新年の思い

名ばかりのお正月がいつしか過ぎ去った一日、私は吉野町より南の満人街の広い通りを歩いていた。吉野町では、その通りも狭くなるほどに屋台や机を持出して商品が溢れていたのに、この満人街では人通りは少ない上、道路上に直かに僅かな品を並べて売っていた。買物が目的でないから、漠然とそれらの商品を見やり乍ら歩いていると、木炭を売っているのが見えた。黒い木炭が五、六個、それもあまり長くない、一番長いので十五糎位のもの。その一塊りが二十円程の札をつけて売られていた。その量は手焙りに使ってもよく保って一日分、炊事に使っても充分煮炊き出来る分量とは云えない。それを見た私は淋しく物悲しくなって、その場をいそいで通り過ぎた。

鉄西の空き地には今も新たに大きな穴が掘られているという。既に掘られた穴は難民の死体で満杯となったので、新しい穴が掘られているとの噂である。栄養失調の上に加えてこの凍てつくような厳寒、而も身を覆ふものとてないとあっては待つものは死のみである。難民となって新京に辿りついた人達を襲うこの悲劇は、筆絶そのものである。而もこの悲劇に打つべき手さえない日本人の今日がここにある。無念と言わずして何だろうか。

耐火煉瓦の窯は石炭が真っ赤に燃えて、そのお蔭で室内では寒さを気にすることはない。有難い、そして子供達も元気で安全だ。難民がつぎつぎ死んでゆく此頃に、この幸せを得られる廻り合わせを誰に感謝すべきだろうか。

元旦を過ぎて何日経っただろうか。或る朝起きて出窓から下を見ると真白に雪が降っていた。それは実に珍しい眺めだった。周囲の木立にも垣根にも雪がかかっているが、斑らである。粉雪だ。道路上は二糎、三糎位だろうか、粉雪で一面に真白だった。一年前の冬にもこんな雪景色があっただろうかと、しばらく美しい真白の絨毯を見惚れていた。するとその時、師団兵営の方からの道を一人の男が、粉雪を

踏みしめ乍らすぐ目の前の十字路へ進んで来た。こんな寒い朝なのにその大男は真白のルパシカを着ている。ロシヤ人だ。その白いルパシカが少しの寒風にそよいでいるようだ。私は初めて見るルパシカ姿を珍らしく感じながら見つめていた。その大男は酒に酔っているらしく、少し右に揺れ左に揺れて千鳥足でゆれながら歩いている。あの強烈な燃えるウオッカでさえ、一気に呑み干すほどアルコールに強いロシヤ人が千鳥足でよろけている。私は不思議だった。ソ連軍人が兵営で正月を祝っての帰り途だろうか。それにしては白いルパシカ姿である。寒さが苦にならないのだろうか。このようなことを考え乍ら見ている内にその姿は羽衣町を東へと消えて行った。

酒に酔って路上を千鳥足でよろけて歩く酔いどれは日本人だけが持つ特性で、中国人や満人は絶対にあり得ないものだと聞いていた。ルパシカはロシヤ人の衣装だ。ロシヤ人にも千鳥足で外を歩く風習があるのか。私の疑問はまだ解けないままである。珍らしく降った粉雪は幾日かその後残っていたがいつの間にか消え、再び凍てついたような黄色の大地となっていた。

そして日本人はどうなるのか、どうすればよいのか何も判らないまま、不安の日はまだ続いていた。

新しい年を迎えても、お正月気分を味わうことは出来ず、唯年号だけが変ったに過ぎなかった。日本全土は米国の占領下にあり、これからどうなるのかと少からず不安だった。況して満州大陸はソ連軍に不法占拠され、各方面で悲惨な事件が続発する中で、在満日本人は先行き不明の運命に翻弄されながら、じっと我慢の日を送るよりほかはなかった。

久し振りに降った粉雪がいつしか消え、再び大陸の素肌が蘇っていた。けれど新京市内の日本人は暖房すらないままならない寒い冬に唇をかみしめていた。公共事業の一つとしてソ連軍から操業命令まで出されたのに、石炭ガスは原料炭の品切れで供給停止に追い込れ、再開の目途がなく徒らに月日が過ぎていた。唯救いだったのは、電燈が消えることはなかったことと水道水が出たことであった。

一体ソ連はこの大陸をどうしようとしているのか。その明確な占領の意図は一向に判らなかった。明治以来の宿敵日本軍を殆んど斗わずして追い払い、同時に偽満帝国を崩壊させたばかりか、旅順、大連にまで進駐したとの噂も傳えられた。ソ連は極東の不凍港大連に加え、曽つての軍港旅順まで手に入れたとあれば、容易に手

離さないのではなかろうか。それを考えると、この度の不法侵入で一挙に時計の針を四十年も明治の昔に逆行させたこととなり、今後再び満州大陸を手離すことなく、極東アジアの経営に力を致すことになるのかも知れない。かくてソ連はアジア大陸最大の版図を有する超大国となり、北米アメリカと対決するに至るのか。

石原莞爾大佐がいみじくも予言した、世界最終戦論が現実のものとなる日が来るのかも知れぬ。それは資本主義と共産主義の二者択一を世界の国々に迫ることとなり、第三次世界大戦が戦われることを意味している。弱小国に転落した日本の将来はどうなるのか。東洋における共産主義の防壁であった日本を完膚なき迄にたたき潰して了った今となっては、アメリカが自らが共産帝国の前に立ちはだかることになる。その最後の戦いに勝ちを収める自信があるのか、それがどういう展開になるのか私には判らない。

祖国日本はどうなるのか。天皇の戦争責任が問われるとの噂が伝えられる。日本の国体はどうなるのか。無条件降伏とあれば、日本の将来はすべて戦勝国側の掌中にある。第一次世界大戦での敗戦国独逸は国際連盟によって裁かれた。その結果は余りにも報復的だった。独逸は再軍備が許されないばかりか、天文学的数字の莫大な賠償金を課された。それは過酷以上の苦渋と耐乏を独逸国民に味わせることとなった。その結果として、予想外の超インフレーションを招き、罪なき独逸国民を塗炭の苦しみに陥しいれた。年を経て連盟国側の箍（タガ）の弛緩に乗ずるかのように、反動勢力ファシズムのナチス党の台頭となり、独逸国民の大多数が救世主の如くに之を迎えたことの責の一半は戦勝国及び国際連盟にあったと言っても過言ではない。

昭和の初め頃、独逸の小話がさかんに語られた。独逸に兄弟がいた。兄はぐうたらで酒呑みだったが、弟は働き者でよく働き貯金をしていた。兄は来る日も来る日も酔いつぶれ、家は酒の空瓶で一杯になっていた。そんな時敗戦ドイツは超インフレに襲われ、弟の貯金は瞬く間に無いのも同然となって窮乏の日を送ったのに反し、兄は納屋に放り込んでおいた空き瓶がインフレ高騰につれて次第に高価な品となり、生活にこと欠かなかったという笑えない話である。此の小話はインフレ高騰が、庶民の生活にどれほど深刻な影響を及ぼすかを戒めたものであった。敗戦後の日本及日本人はその再来の苦しさを味わうことになるのか。

旅順見学の回想

日露戦争のとき二〇三高地の攻撃や東鶏冠山の占領に日本軍がどれほど多くの犠牲を出したかは歴史に明かである。旅順を見学したとき、広瀬中佐が旅順港の封鎖に苦心したという港口の意外な狭さ、左右の岬が高い山と思っていたのに、唯の土堤にも等しい低いものだったことなど、当時の両軍の戦闘能力の未熟さが偲ばれ今昔の感に堪えなかった。それよりも、記念品勝利館の中国の古磁器の美しさが忘れられない。旅順の港を見下ろす小高い丘､白玉山に丸くて高い表忠塔が建っていた。見学旅行の最後に、この表忠塔に登ったことがあった。同行七、八名だったが、この内に一人の中卒新採用者がいた。石造の表忠塔の内部には螺旋状の鉄の階段があり、足許の鉄板の間はすきすきで、昇るにつれて下方が次第に低くなるのが見透せる形となっていた。尚､空高く聳える塔の上部は常に多少揺れているとの話だった。皆が昇り出したとき、私は新卒の少年に付添うように彼の後ろから之に随い中段位まで進んだときであった。少年の前を登っていた今村という中年の剽軽な社員が少年をからかうように「アッ本当に揺れているわ、揺れている！」と諧謔（おど）けて何遍も云った途端、少年の顔は次第に青ざめ、踏みしめる足まで心なしか震え出していた。「大丈夫だ、揺れてなんかいない」と私は励げまし乍ら昇りつめて、塔頂部の環状見晴台に立ち、遥かに四方の古戦場を望めつつ感慨も新たに当時を偲んでいた。他の社員らも暫く展望台からの眺めを楽しんだあと、先頭から降り始めたので私も一緒に降りだした。少年は新入りなので、気軽に他の者に声をかけることもなく私についてくる。降りは登る時よりも尚すきすきに下方が全部見透せるので足許も心細げである｡私はわざと平気を装い鉄板を踏む足音も高く先行するのだが、少年がともすれば遅れ勝ちとなるうちに他の者たちはどんどん降りて了い、私が少年に気遣いながら降り終えたときは、全員が塔の外に出て了っていた。やっとのことで新卒少年が降り終えたので、塔の扉を押して外へ出ようとしたところ扉が開かない。不審に思い更に強く果ては少年と二人で押してもビクともしない。私は閉ぢ込められたことに気づき、扉の透き間から力一杯大きな声を出して叫んだが、外はひっそりと静まり返ったままである。大声で叫んでは聞き耳を立てて外の様子をうかがうが足音一つ聞えず、人の近寄る気配は全くない。外の土産物売店との距離は百米もないのだが聞えないらしい。全く困って了った。塔の中には私と少年二人だ

けである。同行の社員が二人の不在に気付く筈だが、それと知らず駅へ向っているのだろうか。僅かな扉の透き間から外を見通すと、まだ明るいが見えるのは砂礫ばかり、塔の遥か天辺はかすかに細い光がさし込んでいるが、閉ぢ込められた塔内は真暗だ。どうにも施す術がない。叫びつづけても却って疲れるばかりなので、待つしかないと覚悟を決め、間をおいては時々叫んでいた。どれくらい時間が経っただろうか。三十分も過ぎただろうか。私が何十遍目かの叫びを上げた時、どやどやと人の足音がちかづいて来て「居る！居る！」と外から歓びの声が聞えた。漸く重い扉が開かれて、二人は外に助け出された。鍵を管理している売店の主人は申訳なさそうに頭を下げて謝った。「いつもお客の人数を確めてから鍵を掛けるのですが、今日はうっかりして閉めて了いましたので」と。皆が大笑いをしてこの茶番劇は終ったが、万一気付かれなかったら翌日か翌々日か、次に塔に登る客が来る迄は閉ぢられたままになるところだった。旅順の駅に近づいた頃、一行が二人のいないのに不審を抱き、戻ってきて売店の主人に確めた結果のことだった。主人の話では以前にも同じようなことがあり、一人が一晩閉ぢ込められ翌朝展望台から白布を振りながら助けを求めているのを通りがかりの人が発見、その連絡を受けて初めて気付いたという。売店では登る人数をいつも記録していたというが、偶にはこうした誤りがあるらしい。私たちの場合は同僚が気付いたからよかったものの、単独の旅行者ならとんだ迷惑というものだ。

渡満前夜

関東州は清国との条約によって租借地となり、期限が来たときは返還せねばならないとされていた。ところが清が滅亡したあとの政権が安定しないことに、将来の不安、特に満州に於ける日本の利権はどうなるのかの問題と共に、ソ連の進出を虞れた日本の軍部が何はともあれ、東北満州の安定と日本の利権確保を図ることにより、共産帝国への防壁を確固たるものにすることが第一の目的ではなかったのか。それなれば、日本はより以上に隠忍自重すべきではなかったのか。

昭和六年の柳条湖事件は日本軍が大陸政策の進展を目的として画策したものであることは、軍の発表やマスコミの報道に拘らず国民が広く推測していたところであった。大正末期から昭和初期にかけて日本は不況のドン底にあった。第一次欧州大戦時好景気に湧き立ったのも束の間で、関東大震災後は反動的不況に陥ち入り、

低迷する景気は政府の金融政策の失敗とも重なり、その活路を見出せぬまま推移していた。大正時代は、学校卒業者はまだ売り手市場で各種企業からの採用が多く、引く手数多の状況で、卒業見込生は毎日が御馳走攻めに遭い、自ら就職先を選択していたという。昭和に入ると、之が一変買い手市場となり「大学は出たけれど」学生は就職口を求めて東奔西走するしかない世界と変貌した。運よく就職出来た者で月給は、最高六十円は極少で、一流企業でも五十円の月給なら立派なもの、普通はそれ以下で三十円でも就職できればほっとする時代であった。従って、長男で家業があるとなれば、就職の不可能なことは自明の理、昭和四年高商が大学に昇格したのを好機として更に進学を果たしている内に、政治は軍人が牛耳る世となり、社会主義思想の弾圧、赤狩りが横行、マルクスの「資本論」を所持しているとの理由だけで検挙投獄される時代と変化した。そして昭和六年、満州国建国の時代に入る。昭和七年春、同僚が夫々就職を果し散っていく中で親の意向を汲み旁々自らにも言い聞かせて、家業に従事することを決意して帰郷した。

当時約五円の汽車賃を払って上り列車に乗り込み、逢坂山の長いトンネルを抜ける間は窓を閉ぢ煙の煤をよけて通過し間もなく大津だ。湖影が見えるようになると、車内の風景は俄然として田舎風の服装が際立って目立つようになり、農業県に入りましたとばかりに、如実に経済的隔差を感じさせた。それは時代の進歩から取り残されたまま、どうにもならない素朴さと時代遅れを自認しているかの如き姿であった。

郷里での零細な稼業は仕来り通り動いていて、順調と云えない迄も田舎なりに繁昌していた。本店は旧城下町本通りにあり、幾棟かの倉庫は各産地から貸切貨車で荷物を運び入れるだけの面積を有し、数人の店員と女中二人を擁し卸小売業を営んでいた。二番町通りは数軒の問屋が並んでいたが、商業地区の中心街から北寄りにはずれた混住地帯であった。維新後は旧城下の土橋町、川原町が小売業中心の繁華街となり、人の往来最も多く呉服、小間物、雑貨から薬局、酒屋など軒を並べ、映画館や遊戯場、銀行から風呂屋、飲食店までが揃い、農村からの顧客もこの辺りに行けば一応用達し出来る地帯を形成していた。その中心街に間口二間ながら支店を設け、祖母が番頭の一世帯と同居して、店番をしていた。その当時の町の人口約三万、近村併せても五、六万人で、彦根は静かで物価が安い暮し易い隠居町として、都会とは隔絶した世界であった。旧藩政時代には人口も倍以上だったのが、明治に

なって次第に都会に出るものが続出し旁々、県庁が大津に移ってからは、その趨勢は止めようがなかった。唯、経済力に於いては旧藩時代の名残を停め、県下の有力な資産家が揃っていたし、商業の世界では県内で雄位を保っていた。

昭和八年、町内の老舗商人が共同出資して中心部に鉄筋三階建ての百貨店を作るという問題が起り、父は諸般の事情から支店を売却して之に参加することとした。旁々、私の卒業帰郷をも考慮してか、向い側借家二軒を廃して事務所とし、その奥に二階建総桧の本宅を新築し、之に仏間を移すと共にその一間を祖母の住居に充てることになった。父と義母も之に移り住んだが、炊事は従前どおり本店炊事場で行うため、新築の入口は玄関とも炊事場ともつかぬ、中途半端で格構のつかぬものとなり後日に問題を残すものとなった。

私の生母は出産後一年で死亡したころ、祖父が家業を守りつつ長男の父を頭に十人の子を育て、私は孫であるのに末っ子の如く育てられた思出がある。私が六才のとき祖父が亡くなり、その頃後妻として来た義母を実の母と思い込み成長した関係から父には義母に口には云えない遠慮があったようだ。父は世間の交際もあり、外出勝ちで商売は帳面まで殆んど義母がしていたので、事実上すべてのことに父は頭が上がらなかったのかも知れない。我家の将来に係わる之等の問題については、父から何の相談もなく、又意見を求められることはなかった。而も新築の費用、約一万円の内六千円は日本農工銀行の借財であった。それらについて私は不満であった。一軒の商家として使用人併て十数人が一つ屋根の下に起居し、労働集約的に仕事する中で年商一万円には遠く達せず、朝早くから夜遅くまで働いても売り上げを飛躍的に増大させることは到底望み得ない零細企業であった。産地との取引は信用取引で、出たとこ勝負の小切手払いで決済していたのに反し、売上の大半を占める卸売りは年一回轉すればいい方で、支払を受けた■■は又貸込むこととなり、それは唯売り上げ実績を上げ数量をこなし得るのみで、収益面ではさしてプラスとなること少く、而も卸売先が農村地帯の小規模雑貨店が主とあっては、安価商品販売が主体であった。

小売業では有田焼などの需要もあり、家庭用品、進物品などの御得意先や一般顧客もあったが、売掛けが多く月末又は翌月支払いがその殆んどを占め、手数の要することが甚しかったがそれが、それが商習慣であった。又、百貨店では場代を坪数に従って徴収され、売り上げ収益は収支相償う程度で、プラスになることは少なかっ

た。株式会社形態の百貨店も寄合世帯とあっては、収益が上がれば適宜物見遊山等に浪費すること多く、漫然と田舎旦那商売を楽しむ形以上の何物でもなかった。

家業に於ける細々した仕事は子供の頃から手伝いしていたので、凡そ手慣れてはいたものの生業とも云うべき些やかな商売で、田舎に埋もれたまま一生を終るのはと息もつまる思いであった。

百貨店問題につき大阪大丸勤務の学友山本君に意見を求めたが、共同出資の寄合世帯では成功は覚束かないとあった。依って将来への展望を求め父を説得し、大阪の業界代表問屋へ見習いとして入社を願い、神戸から通勤することとなり営業事務、経理事務担当の傍ら外国貿易業務も担当することになった。この問屋は株式会社だったが、見習としてでも勤務させた頂いたことは、この業界を知る上で、大きな参考知識を獲得するきっかけとなり、今も非常に感謝している。当時の大阪は日本経済の中心都市であった。その大阪の土佐堀に支店も持つこの問屋は、その資本力の故に、各生産地問屋と比肩して窯屋を牛耳る力を持ち、有利に仕入れた品を国内各地の代表的店舗へ卸すと共に、朝鮮台湾満州へも販路を持っていた。

番頭が出張する際は必ず大きな革鞄に多くの現物見本を詰め込み、之を肩にして出発して行った。これが当時の見本販売の通例の姿であった。見本鞄は二個が通常であった。例外としては、有田産地問屋の主人などは店員を伴ひ七、八個持参する慣わしであった。普通なれば、列車持込は禁止の筈が、産地商売奨励のためとて特に見逃がされていた。当時主な駅には「赤帽さん」が待機していた。それで目的の駅到着のときは、赤帽さんに駄賃を払うと荷物を開札口へ出してくれるようになっていた。日本内地では、之が当時の駅頭風景であった。郷里に居たとき、この見本携帯出張の状況を見て、無駄な労力を費やすものと感じた。写真にして持参すればよいものをと考えたが、まだカラー写真の発達していないモノクロ時代、而も写真では現物感が出ない。従って苦労でも現物見本を携え顧客先では座敷一ぱい足の踏み場もないほどに見本を並べて、注文を受けるのが仕来りであった。

大阪の問屋では、各産地からの出張見本販売に対応注文する傍ら、その資本力によって美濃各産地に支店を持ち、独立採算で窯出品買い付けから販売までをしていた。そして、外地及び内地の顧客店への荷捌きは、貨車輸送の他、船舶輸送によるもの多く、仕入並販売には多くの店員小僧が多忙を極めていた。内地販売では郷里の家業同様、卸売掛金の集金は夫々の顧客の店の力、その地方の経済力に係わるの

で、人口の多い都市の店になるほど、仕切支払いは良好だった。そして田舎になるほど、内金としての集金が実態であった。しかし、外地朝鮮、台湾、満州などの場合は商品発送と同時に為替手形を発行し、之に裏書を求める形式で集金し、期限略三ヶ月だった。外国貿易では、エジプトカイロへの発送はインド商人、豪州シドニー宛てはイギリス人商人が相手で、荷物の船積みと同時にＢＬ発行の上、銀行割引を求めるという形で資本の回転が早く、郷里の家業の場合と比較して隔段の差があることに瞠目する思いであった。

ある日、インド商人の事務所へ数百円の集金に行ったことがあった。その時、繊維を扱う店の小僧が来て数千円の代金を受取るのを見て、明かに気落ちする自分を発見していた。数百円と雖も大金であったが、夫に数倍する代金を小僧の如き若年者が気軽に持ち帰るのを見て、本当のところガッカリしていた。繊維商が羨ましくはなかったが、経済力の差をまざまざと見せつけられた思いだった。当時の日本の産業界の代表的問屋の年商が多くの人達の努力を結集しても、尚約六十万円程であった。それに比べて、郷里の家業はその百分の一以下で、而も利益率回転率の大きな開きを知っては気落ちするばかりだった。

此頃、インドネシヤ比島方面の販路拡張のため出張方の依頼があったが、私は断って之を機会に辞して郷里に帰ることにした。代表的問屋を預る年配の大番頭も世界の動きには至極鈍感であることに驚いたのも一つの理由だった。当時の日本は、満州事変、満州建国に乗じ軍部の勢力が強大となり、その影響が近隣に波及するのを警戒して、欧米がその植民地擁護のためＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄラインを形成し日本の経済活動を封じ込め、その蠢動を防止しようとしていた。この時、南方への販路拡張など全く時代認識に缺けるもので、仮令調査のための出張としても、無駄な失費に終ることは自明と感じたからでもあった。大阪の問屋を辞す前夜、前出相談役や吉田常務の大番頭さんらが送別会を開いて、前途を祝福してくれた。私が郷里へ帰れば、小さい乍らも一つの取引先を経営することになる関係もあってのことだったが、その席でその好意に対して謝意を述べると共に、今南方開拓の時機でないことも意見として述べてように記憶する。

この問屋の経営形態は株式会社であったが、その中味は藩政時代の大店・老舗が、形を装うただけのもので、殆んど顔を見せない主人が株式の殆んどを所有し、年季奉公の番頭達が、その一部の分与を受けて経営に当ることによって、その忠誠を示

す度合いいが決算によって示されるというものであった。

日本の資本主義の発展の初期段階は、国内すべての経営がお店（タナ）の大型化で社員といい重役といい、その名称の如何に拘らずその創業主には頭の上らない時代であった。夫は又歴史の深浅、営業規模の大小に拘らず厳然として存在し、科学的学問的理論、抽象的批判などの介入を許すことのない世界であった。昭和の初め、初期費本主義の発展を計る資本家と働く労働者階級の人々との間の争いが次第に深刻になろうとしていた。その頃の資本家は共産主義を蛇蝎の如く敵視すると同時に、労働組合運動に対しても理解を示すことなく、すべて企業経営を脅かす存在として国家の権力と一体となり、その封殺を図ることに窮々としていた。不況に苦しむ国民、不作に悩やむ農民の政治不信に乗じた軍部が政治権力をもその手に収め画策したのが満州事変となり、更に日中事変に拡大して行ったわけであった。

大阪を辞して帰郷し、家業に専念しつつ将来を展望し、その発展の道を模索しては独りその険しさを感じていた。当時はどの店でも殆んど大福帳を主とし独自に収支決算など行うことなく、各々の所得については、国の委嘱を受けた地方の有力者が所得税調査委員となり、当局と協議して町内全戸に関し大まかに甲は乙に比し上か下かを判断の上、課税決定を行う時代であったので、正確に収支記録するものは却て不利を招く結果となる仕組みだった。況して独立決算の基礎となる年末商品棚卸の如きは、年末年始の繁忙のときを休業して棚卸調査することなど全く困難で、親にも店員にもその認識が全然なく、協力を得るなど出来ないどころか、そのようなことは商売人のすべきことでないと、反対の意嚮が示されては一歩も前進し得ない状況だった。父の意見に従い、町内の代表的商家の主人に面接を求め参考意見を求めたが、結果はうやむやの返答しか得られずすべてが闇の中だった。

父は凡その営業方針を示すのみで、殆んど家業に携わることなく、卸売は番頭が、小売は義母が差配し、私自身の介入の余地はなく、経理を明かにして将来の方針を探ろう術もない状態では自分の占める場所もない。かくては自らの将来も五里霧中の上、店員達の将来の所遇改善責任をも感じ、その打開策をどこに求めるかについて苦悩する日が続いた。義母は私が商売向きの人間でないと放言し、商売人は嘘も平然と言える者でないと駄目だという。私自身そうは考えていなかったが、世間の商売人の世界がそれによって成り立っているならば、確かに私は田舎の小商売向きではない。而も税の問題につき、ごまかしを平然とやり切る自信は全くない。帳簿

を殊に売上げを正確に計上した結果が負担増となっては、彼此の業種間、同業者間でも明かに不利なことは明白で、全く目標を失って了っていた。

もう一つ私が当分家業を離れる決心を固める原因となった問題があった。それは卸売り販売の販路を県下一円の小売店及近村農業協同組合等にまで拡大し、県下一の卸業者としての名声を高めるまでに発展させた功績は、同年配の二番頭、若園丁二君によるところが最も大きかった。その着眼と実行、計画と実践は仕入れ、販売両面に於いてすべての牽引力であり、他は之に追随するのみの存在であった。彼は義母の親戚にあたり、その小学校五年生当時、岐阜から転校して店から通学することになった。彼の実父母は岐阜市で剣道用具を商っていたのを廃業して、両親は裏の二階建一戸を貸与を条件に来彦、父親は拙父の紹介で近江絹糸紡績 KK の門衛として勤務、母親は祖母の茶飲呑友達として交際を重ねる中で、若園は高等小学校を卒業後、営業に専念するようになった。因に若園家の長男は大垣市で後日呉服店を営んで立派に生計を立てるに至っていたが、三男四男は幼いので両親と共に当地に来て、二男同様通学し卒業後は、暫く二男若園同様店を手伝っていたが、長ずるに及び夫々の道を求めて去って行った。岐阜市での剣道用具店を廃業するに至った事情は私は詳しくは知らない。私が勉学中、店は主として義母と若園によって動いていたと云っても過言ではなかった。処が昭和初頃だったと記憶するが、突然若園が給与問題から退店して協和銀行へ勤めると云ったらしい。父は突然のことで困ったようだった。そして思案の挙句、将来勤めあげた後は裏の二階建一戸住宅を土地付で無償贈与するとの一札を与えて、勤務を継続することに落着したようだった。この事についても父は私に話をしたことがなかった。或いは義母の提案をそのまま受け容れたのかも知れなかった。給与問題それは当然に考慮すべき大事なものには違いなかったが、それをも含めて我家の将来を図る途として満州行きの決意を固めたとも云える。

そんな頃、大連の満鉄消費組合勤務の義母の実弟が休暇帰国し、種々満州事情を聞いたことが発端で渡満を考えるようになったが、家業を継ぐべき立場を考えると、簡単に決意した訳ではなかった。悩み抜いた挙句の結論として、現状では私の居場所がない上に、私自身の家族さえもが、此の家では負担となるようでは、切角の店員達にも報ゆべき術がなくなることになる。父母もまだ当分働けるなら暫く家を出よう。そして何とか家業の将来の活路を外から見直すのも一つ方法である。満州国

は「五族協和」の理想国家建設を旗印として建国され、満鉄には様々な理想を抱いた若者が活動しているというなら、そんな世界に飛び込んで自分なりの境地を発見し、理想境建設の事業に携わることも生甲斐ではないかとの決論に達した。

その結果として、大連の佐藤の叔父が懇意の中国青島市在住の貿易商青木某を仲介として、南満州瓦斯 KK 谷川善次郎社長に紹介の結果、履歴書提出の運びとなった。神戸大学ゼミ社会政策科の八木助市教授の口添えで田崎学長の推薦状も頂いて、遂に昭和十三年二月末出発、三月初大連本社に出頭、採用決定となった。大学卒業後六年遅れで、試傭期間二ヶ月後本採用となってから七年半、漸く自らの世界が見えかけた折の敗戦である。之が自ら招いた運命となれば、当然甘受しなければならないが、正子や子供達に何の罪があろう。このような明日も知れぬ状況に追い込まれ、その道連れにせねばならないとはどうしたことか。郷里を出たことが誤の第一歩だったのか。過ぎたことを今更悔やんでもはじまらない。何としても家族を無事に郷里に連れて帰りたい。しかしその道が開けるか否かは全く判らぬままである。

家族の冬生活

家族が帰京の時にと用意しておいた石まじりの白米も一ヶ月とはもたなかった。毎日、二人で白い石を選り出すこともなくなってからは豫て食糧倉庫から各社宅へ分配した麻袋入りの白米の恩恵に預かることとなったが、それもいつまでも保つものではない。同居の渡辺家二人と私たち家族五人の大事な食料である。一日でも長く食い伸ばさねばならない。正子は買って来た餅玉蜀黍を白米に混ぜたり馬鈴薯を代用したりして、耐乏生活に入りつつあった。場合によっては、折を計って私が働き口を探して生活を支えねばならない。どんな仕事でも選り好み出来ない。家族の糊口を凌がせるためには是非とも働き先を探さねばならない。寒い二月が過ぎ三月に入れば、愈々その事を真剣に考えよう。それにしても、鵜木君たちが急造してくれた耐火煉瓦製の炊事竈兼用暖房施設は有難かった。毎日の石炭消費量は少しで済んだし、貯蔵の石炭は二階の階段までギッシリ豊富であった。それに比べると外部の一般社宅は氣の毒な状態であろうと察していた。ソ連軍司令部から、南新京ガスホールダーの冬季暖房用に缺かすことが出来ないとの理由で運搬許可をとりつけてた上、警備のために同乗したソ連兵を買収して、各社宅へ石炭を運んだのも一回きりであった。同じ手段を何回もとれる筈もなく、又石炭自体が、もう工場には全然

無くなっていた。平時なれば各社宅へ運ぶコークスも一ヶ月は保たないので、次の補給を要した筈であるが、もう補給のすべがない。その点、構内社宅はすべてが運がよかった。外部社宅の人達には申訳ない程幸運であった。

朝起きてから夜臥むまで、主として六畳の一間で過すのだから、何をするにも時間はたっぷり有り余る程あったが、先行きの生活の不安があると何となく心が落ち着かず、撫松路から持ってきた書物を読む気がしない。神戸大学の盲目の経済学博士、坂西由蔵教授の西洋経済史のノートなども部屋の隅においたままである。武彦、玲子はまだ学齢に達していないが、廸子は小学校三年の課程を一学期終えただけで、一応教科書などを揃えて折にふれて勉強していたかも知れないが、明確な記憶は残っていない。このとき運命の時が刻々と近づいていたのに全く気がつく筈もなかった。

一月十五日、暦では小正月、奈良では若草山の山焼きが行われる日だ。子供らと形ばかりの朝食をとったあとすることもないので、正子が吉野町へ出たついでに買っておいて呉れた煙草の葉を、日英小辞典コンサイスの頁を一枚宛破りとって、煙草の手巻器に入れて手巻き煙草を作っては喫っていた。辞典をつぶすのは勿体ない話だが、故国に帰る時が来てもどうせ持って帰れる訳でないし、他の紙で巻いては辛くて全然煙草の味がしない。妙なもので、この頃、誰からでもなくコンサイスの紙が煙草に最適であるという話が傳っていた。初めは不器用に両手の指先で、どうにか煙草の形に造り上げることを暇つぶしの楽しみにしていたが、その内に長さ7cm位の煙草巻器が手に入り、之を使うと比較的簡単に手巻煙草が出来るようになった。一日に何本かの煙草を作って喫うことが、日課の一つになっていた。そんなにまでして煙草を喫わなくてもよいのだが、煙草の葉が手に入るとなると、矢張り時たま喫って見たくなるというものである。

植民地化への思い

終戦後の八月、新京へ帰って初めて吉野町を歩いたとき戦時中には全く見られなかった日本製の清酒の一升瓶入りがずらりと並べられているのに目を見張ったのだったが、煙草の葉の刻んだのが山のように積まれて、目方売りされていたのも初めて見る珍らしい風景だった。日本では専売局が巻煙草を製造し、十本入廿本入などの函入りでしか手に入らないので、生の葉を刻んで街頭で目方売りする光景など

見たこともないことだった。

日本では広島の岳祖父、母方でも煙草の畑を持っていたが、政府の専売品目なので栽培している葉の枚数まで調査記録され、乾燥して後納入する迄、厳重に監視下におかれて、葉一枚さえごまかすことが出来なかった。それが戦争中は満州でも国内同様配給品となり、一ヶ月に幾函かが手に入れば、後生大事に貴重品の如く一本一本を味ったものだった。それが金さえ出せばいくらでも刻んだ葉が入手出来る世と変れば、敗戦後ではあっても何か解放感があり、新鮮な時節の到来を思わせるものがあった。

中学時代、田口のパパがアメリカから帰国したときも、罐入りの煙草の葉を取り出しては紙に巻き、巻き終るころ紙の端を舌で舐めて濡らして一本の煙草に仕上げるのを物珍しく眺めていたことなども思い合せ、国情の違いを不思議と感じたものだった。

煙草の葉が山のように積まれ目方売りされているのを物珍らしく眺めたとき、意外にも刻まれた葉がパサパサでなく、しっとりと湿ったような感じがあることを知った。それから後、煙草の葉には砂糖や各種のアルコールを加えることによって味付けがなされるという話も聞かされ、世の中には知らないことが沢山あるものだと驚いたものだ。

敗戦は残念ではあるが、日満、日中その所を換え異国情緒が次第に鮮明となり、それまでは知り得なかったことが次々に露になり、隠されていた真実が各所で表面化し、現実のものとして現われて出るのを驚きと楽しさの入り交った目で看とっていたものである。満州国否日本の権力の重石の下に貧しげな存在としてしか見られなかった彼等の生き活きとした眼の輝き、キビキビしたその活動ぶりを目前にしたとき、植民地化の罪悪を思い知らされると共に、之で良かったのだとも心に刻みつけていた。

収監

十五日の真昼を過ぎていた頃だったか、下から私を呼ぶ声が聞えた。何事かと出窓から下を覗くと、隣の北川君及一階の川原君が中国人巡警らしい一人と共に上を見上げ乍ら呼んでいるのが目に入った。「何か用か？」と尋ねると傍らに立っている北川君が代弁して「尋ねたいことがあるから署へ来てくれと云っている」との返

事である。北川君は二階の隣に居たのが先に降りたらしい。公安局という名称さえそのときは知らなかった。ソ連軍政下で警察行政は蒋介石の国民政府の指揮するところであり、中国政府対在満日本人という関係はあったが、すべて個々の日本人が中国軍警の取り調べを受けねばならぬという訳ではない筈である。何の心当りもない。しかし「尋ねたいことがあるから来てくれ」と云われれば、拒否するわけには行かぬ。どんな問題か知らぬが、署へ出向き質問に答えたらすぐ諒解を得られる筈であると自問自答して、正子に済み次第帰るからと告げて、協和服の上に冬のオーバーをひっかけ梯子を下ろして降りた。

中国巡警一人と会社側からは北川、川原両君と私の三人が共に構内を出て羽衣町を東へ、そのあと駅前中央通りを南下し吉野町を過ぎて満州国統治時代本社人事課長として度々訪れたことのあった元敷島警察署に着いた。それは第二公安分局と改称されていた。三人共、訳が解らぬまま随いて来たが、終始無言であった。何れもがすぐ帰れると思っていたので、毛ほどの不安も感じていなかった。分局内に入り云われるままに一人の巡警の待つ机の前に立った。するとその男は確かな日本語で「ポケット内の持ち物を全部ここへ出しなさい」と云う。尋ねたいことがあると言って連れて来たのに、ポケットの物を出せと言う。之は可怪しいと感じたが仕方がない。云われるままに従うしかない。財布、手帳、ハンカチ等全部を出し終るのを見計って、こちらへ来いと云う。随いて行くと地下室への階段である。降りると半円形に大小の留置場監房がある。理由を示さずに留置するとは怪しからんと心中憤っても始らず、三人別々の監房に入る。私は南側の広いところへ入れられた。狭い入口をくぐって入ると、ガチャンと鉄柵が閉ざされて、私の収監者の一人となった。一人の日本人が先に収れられていたので、私とで二人となったわけだが、その相棒も何故入れられたのか皆目訳が判らないという。便乗勝利で、その権威を示すべく世間に敗戦国日本人を罪人として放り込み、悦に入っているのだろうか。しかしこうなったら騒ぎ立てても仕方がない。暫く保養の積りで温順しくしている他ないとお互いにあきらめていた。

私の収監された房は広さ八畳の間程の板張りで、前後とも直径七糎ほどの黒くて丸い鉄棒が十五糎程の間隔で並び、手は出せるが頭は出ないようになっている。隣りの監房との間は厚い煉瓦壁で声も通らぬようになっていた。留置場全体は半円形で、地上一階地下一階の二段となり、各階正面を中心に大きな監房が左右に夫々二

室の計四室と、一番端に独房が二部屋宛計四室設けられていたので、一階二階全部でその倍の監房があることになる。そして、丁度扇の要めに当る位置に監視官の大机と椅子が用意されていた。ここに座ると、一階二階の監房内の収容者が全部見通せるようになっていた。学校の教壇状に作られた平面の上に監視席があった。その他、半円形留置場の後ろ側にぐるりと三尺幅の廊下があり、この廊下を廻ぐると監房の中の様子が周囲から全部見通せる構造になっていた。

時は一月も半ばである。外気は零下二〇度前後の筈である。すぐ帰れる筈とオーバーをひっかけて来ただけなので、昼間は兎も角夜臥すときは流石に困った。風が吹き込むことはないにしても、夜ともなればじわりと凍るような冷たさが身に浸み込むので、板の間に仰臥すれば、背から体熱が板に逃げてたまったものでない。相棒と二人が横臥してお互いの背中をくっつけて温め合うように密着した上、お互いの足をからませてから二枚のオーバーを布団代りとして上体と下肢の方へ被けて臥すことにした。まだ若かったので、こんな状態でもぐっすり眠ることが出来た。いつ帰れるか判らぬが、一夜我慢すれば会社でも心配しているだろうし、家族からの差し入れがある筈だ。家では心配しているだろうが、私自身何故こんな目に遭わねばならないのか、その訳が判らない。中国側から何の説明もない。全く理不尽な話だ。敗戦国日本の国民だからと云っても、明らかな罪もないのにこの取扱いは何だと腹も立つが、黙って放り込んだまま放置しておくのだから、文句のぶっつけようもない。こうして一夜が明けた。社長も心配してくれているだろう。今日は中国側から何らかの話がある筈だ。こんな時、何か身に恥じることでもあれば自らの心も痛むというものだが、こんな取扱いを受けるべき何物もないので、自分自身は晴れ晴れとした気分で中国の出方を見てやろうと心待ちしていた。北川君、川原君それぞれどうしているのか､別々の監房とあっては連絡も取れず様子の知りようもない。

食事は朝夕二回、高粱の丸い握り飯一ヶと岩塩漬けの甜菜丸大根の三角の小さな切れ端厚さ５ミリ位のを一個を呉れるのだが、それが不思議なことに最初の一週間はその記憶が全然ない。この一週間は広い監房に二人だけだったので、入口から差入れられる握り飯を手にして二人して食べた筈なのに、どうしてかそのことが全然記憶に残ってない。一週間も食べなかったらフラフラになる筈だが、握り飯のことも大根の切れ端のことも二週間目に入り、北側の監房に移ってからのことしか思い出せないのは、なぜだろうか。突然の収監で茫然自失していたわけでは全然ない。

却て罪もない日本人に対する中国側の処置に憤慨していた位なので、すべて平然と対処していたことは明白に記憶にある。

相棒の日本人と色々話をしている間に恐ろしい話を聞いた。当時はそれを事実談と受取り驚きもしたし、若し事実とすれば、公安分局だけの判断でそんな無茶なことが行われるのかとあきれ果て、理性なき勝者側の末端小者によって処断される人こそ、とんでもない災難だと感じていた。その話というのは、夕刻七時頃から取調べの為呼び出されたまま、監房へ帰って来ない者は、児玉公園へ連行されて銃殺されているのだというものだった。そんなことが事実行われているのだろうか。本当のことだろうか。そんなことは、今まで噂にも聞いたことがない。銃殺される者があるとしたら、日本人だろうか。何をしたというのか。児玉公園は曽て教育招集訓練で走り廻った綺麗な芝生のあるところだ。そのどの辺で銃殺するのだろう。近くには元関東軍司令部、現ソ連軍司令部があり、附近には諸官衙や会社のビルも多いところだ。なんぼ夜にと云っても、そんなところは銃殺に適さない場所だ。しかし相手が中国とあれば、場所の適否など構っていないのかも知れない。あれこれ考えると不気味になってくる。しかし、中国官憲であっても、罪もない日本人を無闇に殺すわけではなかろう。そんなことを考えながら広い監房の中で撫然として坐っていた。二人だけなので、話題もすぐ尽きてお互いが黙って坐っていた。

昨日は突然の呼出しでやって来たまま放り込まれたが、三人とも身軽なオーバー姿で来たままなので、家族達が夫々心配しているだろうし、此の事実は社長にも伝っている筈である。それで今日にも衣類などの差入れがあるだろう。留置されていても元気なので、何の心配もいらないが、せめて満服かセーターなどの防寒衣が欲しい。今日にもそれが届くだろう。そんなことを考えながら只待つしかなかった。

それに聞きたいことがあると云って連れて来たので呼出しがある筈である。堅く云えば取調だが、どんな質問があるのだろう。自分にはどれほど考えても、留置されて取調べを受けるべき心当りは何もない。混乱のあとなので、何かの誤解があるのかも知れないが、取調べがあれば、すぐ了解がつき釈放される筈だ。他の監房は見ることも出来ないが、そんなに大勢が収監されているようでもない。取調べの順番も近いだろうし、さして時間がかかるとは思えない。しかし官憲はどこの国でも尊大なもので、自己の都合で事をゆっくり運ぶのが通例で、被疑者の思惑など一向にお構いなしだ。それが混乱後の中国官憲だから尚更だろう。恐らく俄かづくりの

役人が事大的権力を盾として事を処理しようとするのだから尚更時間がかかるのかも知れない。こんな目に遭うのも情けない話だが、こうなればなったで、焦っても始らない。これも経験の一つだ。ゆっくり相手の出方を見てやろうじゃないか。限られた空間に閉ぢ込められた今は、すべては相手の出方を待つしかない。こう考えると尚更気分も落ちついてきていた。家族のことも心配だが、構内社宅に居ることだし、社長公館もすぐ傍なので、何かあれば家族の面倒は見てくれる筈である。今晩は差入の準備をしてくれているのかも知れない。差入れに来ても、恐らく會うことは叶わないだろうが、私たちの居所が判然すれば、家族も一安心するだろう。そんなことを考え乍ら勃然と坐っていた。

監房の監視席はあっても、殆んど姿を見せたことがなかった。いつも椅子だけが大きな机の影に見えるだけだった。そして朝夕以外には殆んど人の動きが見られない。中国官憲は、何をしているのだろう。収監すればもう用済とでも考えているのだろうか。しかし放置されている側はたまったものでない。後側の鉄柵の外の狭い周廻通路の上方に幅 30 糎程のガラス窓が一つあるのが目に入った。縦は 22 糎か 23 糎位あろうか、その下部が丁度地表面らしい。暫くこの窓ガラスを眺めていると、歩道に面しているようで、時々男のズボンをはいた下肢の部分が靴と共に過ぎ去るのが見える。そうだ、ここは地下監房なのだ。じっとこの窓を見つめる。又一人の足が過ぎ去った。日本人だろうか。ズボン姿だ。彼等は自由に歩道を歩いている。足許の窓の中が留置場の監房であることは、恐らく知らずに歩いているのだろう。その窓の内の監房には、私が理由もなく留置されていることなど知らず自由に行動している。あのように自由に歩けるように早くなりたいものだ。板の間に目を移す。地下の南のこの広い監房は一面板張りである。幅 10 糎位の板が南北方向にぎっしりと張りつめてある。ここは元敷島警察署の留置場である。日露戦争後、長春までの鉄道の駅周辺の権益を日本が手に入れてから設置したものだろう。建物内部は隅から隅まで念入りに行届いた工事が整然と行われていることが判る。そして、この地下監房の上の一階のどの辺りかに、曽つて、敷島警察署の兵事係の机があった。新京勤務以来、一年半の間に何回かこの兵事係担当警部に連絡に来たことがあったが、今は地下監房に理由もなく囚われの身となっている。その上、その当時の兵事担当の警部は同じく囚われの身となって、元海軍武官府から家族に宛てたメモを誰に託すともなく、唯連絡してくれることを祈って落としたのを、全く偶然に社員

が拾って私に持ってきたのも何か不思議な因縁であった。その人も恐らくはもう武官府からソ連に連行されているかも知れない。お互いに敗戦国民とあれば、明日のことはどうなるか全く予測がつかない。

長い日本の統治時代には多くの満人がここに閉ぢ込められただろうし、中には私同様理由もなく、無実の罪でここに収監された者がいたかも知れない。権力に物云わせて、随分無理なことがここで行われたかも知れず、その怨念がこり固って、何かの因縁で私がここに居ることになったのかも知れない。

色々なことを考えている間に二日目も暮れて行った。そして、今日は差入れはまだ来なかった。その上取調べもまだなく、何の理由で収監されたか判らぬまま、時間が過ぎて行った。一緒に来た他の二人の様子も全然知ることが出来ないままである。

三日目となる。朝目覚めても背中合せに寝ていた二人が、離れてオーバーを膝にかけて坐る姿勢に変るだけである。顔を洗うことは勿論歯を磨くこともない。地下であるためか寒さは余り感じない。若さの故か、敗戦の緊張のためだろうか。不思議である。今日は差入れが来るだろう。それよりも理由もなく放り込んで、まだ何の取調べもないとはどうしたことか。之がすべてが漫々的（デ）で動く中国流かも知れぬ。子供と遊ぶでもなく本を読むでもない。大人二人がむっくり起きて、広い板間ですることもなく唯じっとしているのはつらい。時間が普段の倍以上の長さに感じられる。

相棒と云うより同房者は依然として二人だけのままである。相手が会社員か否か、どこの住いかは聞かなかった。今更聞いても始まらないし、どうせ何の罪もないのに放り込まれたんだろうと思ったからである。名前も聞く必要を感じなかった。いつから放り込まれたのかも尋ねなかった。私より何日か先に収監されたことは確かだった。その相棒、同房者の話によると、北側の入口から出て真直ぐの廊下の先に取調室があり、そこからは時々拷問に耐え切れなくなった被疑者の悲鳴が聞える。特に、夜中の取調べの時は凄じい声が聞えて何ともいえないつらい気持になるという。私は日が浅いからかまだそんな悲鳴は耳にしていなかったので、実感として捉えることがなかった。主客処を換えた今となっては、何をされても抵抗する術はないが、そんなことの行われないことを心に祈るのみ。

今日も監房の動きは殆んどなく、又無為に時間が過ぎ一月十七日も暮れて行った。

こうして無駄な日が何日も何日も過ぎて行った。それにしても、何故差入れが来ないのだろう。差入れが許されないのだろうか。昼間は苦にならないが、夜寝るとき二人で背中合せにお互いの体熱で温め合って臥すからまだよいものの、一人だけだったら広い板の間に体熱を奪われて、嘸かしつらいことになるだろう。一緒に来た北川君や川原君のところへも差入れがあったような気配がない。二人も困っていることだろう。社長らはどうしているのだろう。ここに収監されていることは判っているのだろうが、何の音沙汰も未だにないのはどうしてだろうか。尚取調べも訊問もまだない。如何に中国流といっても、余りにも非道い処置ではないかと腹が立つ。

ここへ来て六日経った一月二十日午前、相棒が檻から出され暫く時間が過ぎた頃、房に帰って来ての話に、今日釈放されると聞かされたと𠮟んで告げた。「お目出度う、それはよかった」と歓びと犒いの言葉をかけ、共に無実が判ってよかったと明るく笑い𠮟び合った。その時、私は咄嗟に折角の機会を逃してはと感じ、すぐその同房者に依頼した。「私は満州瓦斯の社員だが、貴方が釈放になったら誠に申訳ない話だが、羽衣町の高田社長に私たち三人が、この第二公安分局に留置されていると連絡して下さい。その上何か衣類を差入れしてくれるように伝えて下さい」と祈るような気持ちで頼んだところ「お安い御用です、すぐその足で連絡に行きますから安心して下さい」との返事が返って来た。それから間もなく、その相棒が監から出ると、私一人を残して入口の扉は再びがちゃんと音がして閉ぢられた。しかし私はもう淋しくはなかった。家族へ連絡がつけば、一先づ安心するだろうし、又差入れも来るだろうと、明るい気持で広い房の中で、ぽつんと一人で坐っていた。

その日の午後、かなり時間がすすんだ頃、数人の巡捕が地下監房室へ降りて来るのが目に入った。夫々手に何かを持っていた。その中の一人が私の房の前に立ち私の名を呼んだ。私はすぐ返事をして入口の近くに躙り寄った。差入れだとすぐ判った。扉が開かれて、衣類を私の手に渡すと、扉は再び音を立てて閉ぢられた。が、私は嬉しかった。女房が用意してくれた黒い綿入れの満服上下とセーターが私の手にあった。これさえ有れば私一人だけとなっても、安心して臥すことが出来ると、早速それらを着込むところころになり、温くてこれで心配なくなったと満足していた。それ迄気温のことが殆んど気にならずにいたし、風邪をひくこともなかったが、こんなに着脹れてみると、矢張り寒かったのだなと感じ、よくも我慢出来たものだ

と我ながら感心していた。

一月二十一日午前十時も過ぎた頃だったろうか、差入れの時と同じように私の名が呼ばれ、房から出るように指示された。開けられた扉をくぐり一週間ぶりに監房の外に出た。中国人巡警に随いて北側の入口の五、六段の階段を昇り、留置場の外へ出た。出ると相棒が云っていたように真直ぐに廊下が伸びている。その廊下を暫く進んだとき左側の部屋へ入れと指示された。その部屋は幅２米、奥行き４米位の狭い部屋でそれが取調室というか、訊問の部屋であるとすぐ判った。部屋に入ると、その突き当りの窓際に机が一つ置かれ、中国人の訊問官が一人椅子にかけていた。もう一人の係官らしいのが、机より少し高い窓枠に腰懸けて私を見守っていた。私は何ら疚しいことはないので悪びれることなく、指示されるまま机の前に立ち、訊問担当官に頭を下げた。「椅子にかけなさい」との声に私は机の前の椅子に腰を掛けて、担当官の真正面に相対する形で坐った。そして、初の取調べが始った。

担当官は年令三十才位の小柄な人であった。「これから君の取り調べを始めます。知っていることは正直に答えないといけない」とはっきりした日本語で云い渡した。私は素直に「ハイ」と答えた。私の左側の窓枠に腰をかけ、片足を机の桟においているもう一人は、横から私を見詰め乍らじっと聞き耳を立てていた。担当官は更に云った。「君が会社の公金六十万円をごまかして盗んでいるとの投書があった。君がその金を盗んだのが本当なら、正直に盗んだと答へないといけない」と云う。このとき初めて、あの満鉄の地下金庫へ北川君らが委託した麻袋入り六十万円が問題になっているのだと判った。しかしその事を知っているのは社内でも限られた人達だけの筈である。而も金額も一致している。可怪しい。どこから洩れたのだろうか。尚その金は結局ソ連に接収されて了ったし、私たち三人が盗んだとの投書は事実に反している。どこから六十万円と云う数字が出たのだろうか。投書があったというのは本当だろうか。それにしても、私は満鉄に委託したと云う話をその翌日社長から聞かされただけで麻袋入りの現物さえ見ていないのだ。あのソ連に接収された六十万円が、どうやら問題の焦点らしいし、会社から無くなったお金の嫌疑が私たちに懸けられているらしいと感づき、不思議であり又不審でもあった。

「私は人事課長だったので、社員の給料や賞与に関しては、会社の規定に従い計算した所要の金額を経理課から受取り、それを各人別の給与袋に入れて、夫々の課別に所属長に渡すのが任務であった。その際に計算された所要の金額は、私の責任

に於て受取り保管し分配したが、夫以外の会社の公金については一切承知しません。どれほどの金額がどこにあるかも、私には判りませんでした。従って六十万円という大金については、私は全然判りませんし、又関係はあり得ません」と事実をありのままに答えた。正面の担当官は、私の話にじっと耳をかたむけ頷いていたし、理解したようだったが、左側の男は當がはづれてがっかりしたのか、私が答え終るや間もなく「こいつめ！」と叫び乍ら、手にしていた新聞だったかグラフィック様のものかを丸めて、私の頭を右から左から二、三回往復して叩いた。私がそれに反応せず、正面の担当官の顔を見ていた。

「よろしい。返ってもよい」と担當官は云った。私は立ち上って、軽く頭を下げて部屋を出て、別の男に誘導されて元の監房に戻った。此の間、時間にして凡そ三十分、厳しい取調べの予想に反し意外に短時間だった。そして嫌疑の焦点がはっきりしたので、やがて三人とも無関係なことが証明されるだろうと安心した。それにしても、投書があったとは本当だろうか。六十万円という金額が余りにもピッタリしていることの疑問がいつまでも残っていた。北川経理課長や私は多少社内の金に関係があるとしても、川原瓦斯製造所長にまで嫌疑がかかるとは何としても解せないことだった。監房に帰ってから唯一人でぽつんと真中にあぐらをかき、やがては無実が判って釈放の運びになることは間違いないと信じ、気持は更に一段と落着いていた。

北川、川原両君に対する訊問は、もう済んだのだろうか。出入に注意ばかりしてもいられないので、その事は判らないまま今日も暮れてゆく。

ロシヤ語通訳者

その日の午後二時頃か、一人の日本人が収監されて来た。中肉中背の男である。唯独りだと余りにも無聊なので、之はよい話し相手が出来たと内心乞んでいた。入口の鉄柵がガチャンと閉ぢられて、入って来た男の顔を見るなり、私は驚いた。なんとその人は、昨年十一月工場ヘソ連軍飛行将校がやって来たとき全然言葉が判らないので、若い社員を走らせて通訳に来て貰ったその人だったのだ。その人の名は聞かなかったので、知らぬままだった。あれから約二ヶ月振りの再会である。それにしても、場ちがいの所での再会なのでお互いに驚いていた。

私はその人の顔をよく覚えていた。「どうしたのですか」と尋ねた。その通訳は

あの事件後、ロシヤ語の通訳者に対するソ連軍の検索が厳しくなったので、家を出て転々と居所を移動して姿を晦ましていたが、今日満鉄消費組合の横を歩いていたところを捕らえられ、とうとう収監される破目になって了ったと、如何にも残念そうに意気消沈、肩を落していた。私は慰める言葉もなく昨年の礼を述べたあとは、唯元気を出して下さいとしか云えなかった。何故ロシヤ語を学んだのか、スパイ活動をしていたのではないかというのが逮捕の理由らしかった。それにしても国民政府蒋介石指揮下の中国の警察行政とソ連軍政との組合せに理解出来ないものが残っていた。

その日の午後七時頃、その通訳日本人は取調べのため連れ出されて行った。取調室は幾つかあるようだったが、私の行った部屋か他の部屋かは勿論判らなかった。私はその人が取調を終えて帰って来るのを心配し乍ら心待ちしていた。私のときは三十分程で簡単に済んだが、どうもそう短時間には終りそうもなかった。九時頃もう凡そ二時間経っても、戻って来る気配が全くない。十時を過ぎても帰って来ない。私は心配で落着かなかった。夜もおそく十一時もとうに過ぎた頃、漸く人の気配がしたので、私もほっとしてその通訳の人が戻って来るのを息を殺して見守っていた。監の鉄扉が開かれたあと身を屈めて房に入って来たその人の顔を見て、あっと私は息を呑んだ。なんとその人の細面の艶のあった顔がぽんぽんに丸く脹れ上がり倍くらいの顔になって、ところどころに青い斑点まで出来ているではないか。ひどく拷問されたようなので、気の毒でその顔を正視出来なかった。

中国人が去ったあと余りの面相の変りように私自身戸惑いながら「ひどい拷問があったのですね」と尋ねると、その人は気丈に痛みを堪えながら「長い時間やられました。何人もが入れ替り立ち替り往復ビンタで叩かれ通しでした。挙句の果ては、仰臥して押さえつけたまま薬罐で鼻や口の上へ水を流し続け、本当のことを云えと拷問されたので苦しくて大分水を呑まされました」と絶句した。初めて見る拷問された人の姿に動揺して、私も言葉を失っていた。工場で通訳してくれたあの時の優しい細面が、左右に脹れ上がり倍くらいの赤黒い面相に変って了っている。私は噂通りの拷問の事実を目の当りにして、この人の前途を考え、心配を通り越して敗戦のつらさを噛みしめるばかりだった。その夜は二人が板の間のど真ん中に並んで横になり、お互いのオーバーを布団代りに重ね合せて、眠れぬ夜を過した。

翌二十二日は夕方、通訳の人は再び呼び出された。またかと、ひどい拷問に心を

痛めつつ待っていたが、今度はいつ迄待っても遂に監房に帰って来ることはなかった。

最初の相棒が云っていたように児玉公園で銃殺が行われたのだろうか。ロシヤ語の通訳というだけで、中国側がまさかそんなことはするまい。恐らくソ連軍側に引き渡したのだろう。それにしても、なぜ国民政府がそこまでソ連に媚びなければならないのか。私は中国の処置に不満を感じつつ、此の夜も眠れなかった。

東京音楽団一行の収監

一月二十三日朝、私はなぜか南の監房から北の監房へ移された。北側も南のと同じような広さであった。一番奥の方、即ち入口から遠い端の方に中国人兵士が一人病臥していた。なんでも、八路軍即ち毛沢東の共産軍の兵士だとのことだった。病兵なら何故病院へ収容してやらないのかと一寸疑問を感じていたが、口には出さなかった。もう一人先入りの日本人が居たので、都合三人の同室となった。移動するとき、北川、川原両君がどこに居るのかと他の監房をちらと見たが、それも判らぬままに終った。恐らく私同様、第一回の訊問はもう済んでいる筈だと推測していた。その先入りの日本人が南側二階の一番隅の独房に入れられている日本人を指差し、あの人は何の疑いでか、留置されてからもう二ヶ月にもなって全く血の気が無くなっている。ここに長くいると、皆あんな風に血の気が無くなるようですという。成程ここからよく見えるその独房の人は恐らく六十才位だろうか。気の毒に顔色は青白くやせている。何の嫌疑か、二ヶ月もいるとあんなになるのかと心細くなった。

暫くすると、巡警が一人の中国人を伴って房の中へ入って来た。私ら二人は丁度真中あたりに坐っていたが、少し移動して二人に道をあけた。するとその中国人は八路軍の俘虜病兵の傍らに行き、持参の鞄を開いて診察を始めたので、初めて医者が来たのだと知った。病兵は臥したまま何も物を云わず、医者のなすままに委せていた。暫く診察してから医者は巡警に何か云ったようだったが、私には何を喋ったのか全く判らなかった。診察後、医者と巡警は出て行ったが、別に薬を与えた様子はなかったし、夫以後、巡警は二度とこの房に入って来なかったので、只一回医者が診察したあとは病兵に薬を呑ませることもなかった。私は形だけの診察だと推察していたし、勿論病名など知る由もなかった。そして八路の病兵はそれからも一言も物を云わず身体を動かすでもなく、不気味に横たわっていた。夜臥むときは気味

悪いので、病兵とは少し距離をおいて二人で並んで寝た。

翌一月二十四日は騒がしい一日であり、賑やかな一日でもあった。それは何時頃だったか、留置場の入口が急に騒々しくなり五、六名の若い日本人が連れ込まれて来た。新しい収監者たちは私らの監房に一緒になって入れられてきた。以前私の入っていた南の監房は空房となっている筈なのに、病兵と共に三人も居る房へ新たに五、六名の日本人を入れるのは何故だろう。私の知らぬ間に各房にも相当数のものが放り込まれたのだろうか。でも大勢となって賑やかになり話題も豊富で、留置場の中乍ら楽しく時間が過せると乞んだ。

やがて先にいた日本人が放免され、代りに新しいもの一人入って来るやら、いままでにない出入の激しい日であった。

新入の人達は皆私より若い者ばかりだ。五、六人一緒に来た内の一人と話していて、彼等が東京音楽団の一行だと判った。私は彼等は各地を慰問している間に敗戦となり、帰国の途を絶たれて新京へ辿り着いたのだろうと察していた。詳しくは尋ねなかったが、大同大街の興業銀行ビルの何階かに皆で居るところをソ連兵に見付かって、取り調べられ東京音楽団の一行だと釈明したが、その興銀ビルの地下室に日本兵の隠しておいたのか、武器が多数発見されたことから不逞の輩と疑われ、中国側に引渡され、第二公安分局へ収監されることとなったのだとの話、流石にそれらしく、関東弁の歯切れのよい日本語を話す人達なので、それは本当のことだろうと信じていた。

彼等は若くもあったし音楽家らしく皆明るくて屈託がない人達ばかりなので、陰鬱だった監房内の空気も一変した。私もそれにつられて、留置場に居ることさえ忘れるほど気持が軽くなっていた。

夜、臥すときは八路の病兵を除き七、八名が誰かの発案で交互に逆に臥すことになり、頭と足次は又頭と足となるよう並んで仰臥し、身体をくっつけ合った上から皆のオーバーを被ぶせて、結構温かく寝むことが出来た。大勢で臥むときはこれに限ると独り乞んで、ぐっすり朝迄熟睡していた。

次の日の朝、中国の官憲数人で沢山の高粱の握り飯、直径凡そ十センチ位のを一つ宛取れと入口へ持って来た。大勢が争うようにして之を受取ったあと、塩漬けの大根の切れ端一枚宛を渡された。白米でなく高粱なので所々赤い斑点があり、見た眼には美味そうだが口にするとパサパサで、私は一つ食べるのがやっとだった。一

階と二階は、別の係が配るらしく全部に配り終ってから三つか四つ餘ったのを私たちの房の入口へ戻って来た係が「餘ったのがあるから欲しい者は手を出せ」と云った。私は一つで沢山だったが、東京音楽団の若い人達は流石に一つでは物足りないらしく、すぐ入口に走り寄って監房から手を差し出し、瞬く間に箱の中の握り飯は全部からになった。半円形の房なので、後の方は広いが、入口の方は２米あるかなしの幅だし、そこに黒い鉄棒が数本並び、その真中が動く扉となっている。入口に三人も並んで手を差し出せば、入口全部が塞がる程なので、それを見ていると餓鬼のように見え、浅間しい感じがしたが、朝夕二回だけだから若い人は一つだけではお腹がすくので我慢できないかも知れぬ。新京では大根と云えば、甜菜大根で白くて長い大根ではなく、丸いボール形のを岩塩で漬けて厚さ五糎位に切ったもの、大きさは銀杏の葉の半分もない三角形の一切れが配られる。このような粗食だけで、二か月も三か月も留置されたら、如何に健康な人でも血の気もなくなろうと云うものだ。この高粱の握り飯の鮮烈な記憶が、北の監房でのものしか残っていない。最初の南側の監房で食べた記憶が全くないのは我ながら不思議である。収監されてから朝夕二回同じように高粱の握り飯と塩漬け大根を食った筈なのに、全然覚えていないし、パサパサの感触も残っていない。我ながら不思議で、人間の記憶の頼りなさを改めて考えている。

東京音楽団の一人と話をしているとき故里の話となった。その人は梶田の姓で、醒ヶ井出身だと言った。私の故郷が彦根で、時々醒ヶ井から梶田と名乗る老人の道具屋さんが店に来られていたのを子供の頃から覚えていると話すと、それは自分の父親だという。変なところでの初対面することの奇縁にお互い驚きを新たにしていた。梶田さんは管楽器の奏者だという。更に驚いたことに胃潰瘍なのにウヰスキーが好きだという。きついウヰスキーなど胃に悪いというと、ウヰスキーで胃潰瘍を治療するつもりだから何も気にしていないと自説を翻がえさない頑固さの持主でもあった。

最初の一週間ほどは広い房内に二人だけだったのが、この北の監房には一度に大勢が入って賑やかで、退屈するどころか時間の過ぎるのを忘れるほどだった。立って歩いたり、二、三人が車座になって話をしたり、それぞれが自由な行動をしていた。この時、音楽団の一人が私に話しかけて「東京の留置場では、このような自由は許されない。全員が入口方向に向い整然と正座し、濫りに私語することを禁じら

れている。ここでは監房に入っている気がしない」と云う。経験談なのか噂話なのかは聞き洩らしたが、国情の違いか時代の差かと興味深く思い乍ら、映画で演じられる牢名主の昔話も、本当かも知れないと想像を逞しくしていた。

北へ移って二晩過ぎたころ、八路軍の病兵はもう房内から消えていた。病院へ移されたのか、屍体で運び出されたのか、記憶が残っていない。房内は日本人ばかりとなった。

音楽団の一人が煙草を取り出した。皆で一口宛廻し喫みしようと言い出した。音楽団の仲間なので、自然にこの言葉が出たのだろう。だがマッチがないという。すると一人が立ち上って、最後部の廊下に近いところへ行き、次の監房の者に低く抑えた声で「そちらにマッチがないか」と尋ねた。後部の壁は一米以上もあったと思う。隣りの監房にも音楽団の何人かがいたのかも知れない。次の監房の男から「マッチはあるが、煙草がない」との返事が返って来た。私はその近くに坐っていたので、その問答がよく聞えていた。収監されるとき、所持品は全部預け、持込み出来ないのに隠して持込む者が居ることに驚いていた。多分大勢が一緒に収監されたので、多少監視に隙があったのかも知れなかった。

「煙草を一本送るから代りにマッチを貸してほしい」。

「判った、煙草を呉れ」との返事が来た。音楽団の一人が所持の木綿製薄緑色の外被のポケットに煙草を一本いれてからそっと声をかけた。

「外被のポケットに煙草を入れて振るから外被をつかんでくれ」

「よし判った、振ってくれ」

「一、二、三、それッ！」と外被を振る。相手は外被の端をつかみ、煙草を取出してから煙草に火をつけているらしく暫く間をおいて

「オイ、マッチを送る」

「判った、外被を振ってくれ」

こんなやり取りの後一本の煙草と引換えにマッチが借りられた。手に入れたマッチで、煙草に火をつけて一口喫ったあと、「オイ、次！」と他の一人が立って最後部へ行き、又一口喫って次の者に渡す。こうして私も彼等の仲間扱いで、全く久し振りでほんの一口だけだったが、煙草を吸う機会を得て嬉しかった。代る代るでも、全員が一口宛吸う間に煙草の煙が監房の後部から後ろの廊下に拡って行き気になっていたが、見咎められることはなかった。後部に立つと監視官席からは腰から下が

見えるだけなので、さりげなく移動すれば気付かれることはなかった。只濛々と漂う紫煙だけが気がかりだった。けれども、まもなく煙は消え去ったので、何事もなかったように一同は再び元の姿勢に返り、みな一様に飢えていた煙草の味に満足気だった。

このようなことは一日にそう何回も出来ることではなかった。監視の不在とか公安局員の出入りの様子を見計らって行なうので、一日に一回か二回が精々であった。この頃になって初めて気付いたのだったが、朝の握り飯がすんでから、いつまでこんなところにいなければならぬのかと、鉄柵の傍らに立って考えていたとき、回廊廊下のラヂエーターからほのかなぬくもりが伝わってくるのを感じた。柵の外に手を出すと確かに掌に僅かに温かさが感じられた。だが、それは朝の極く短い一刻だけで、後は元の冷たさに戻って了った。恐らく公安局でも石炭の入手が難しいのだろう。朝のほんのわずかな間だけ、暖房に火を入れることにしているらしかった。でも、温か味が消えてからも充分に着込んでいたので、冷たさを苦痛とは感じなかった。他の若い人達も平気で、少しも苦にする様子はなかった。暫くして私は他の人達の間に仲間入りして坐った。そして、ふと廊下の上部へ視線を移すとここにも南の房の廊下の上と同様に、ガラスをはめ込んだ小窓があるのに気付いた。矢張りそこは地上であった。しばらくその小窓を見ていると、隊列を組んだ五、六名の下肢だけが、並んで通るのが見えた。そこは公安分局の中庭のようだった。そこで分局所属の若い警察官の訓練が行われていた。全員の姿は見えないが、訓練の指揮官がいて若い者の分隊行進の指導をしているらしく「一、二、三、四（イアルサンスー）」「一、二、三、四（イアルサンスー）」との掛け声が聞え、その声に合わせて狭いところをぐるぐる廻って行進している脚だけが、時々窓の傍を通るのが見えた。主客所を換えたと云うのは、適切な表現ではないが、日本は既に埒外に弾き出されて了い、今はソ連軍政下、新京は国民政府が治安の維持に当っている。しかし、ここでは国共両軍が主権を争ってせめぎ合っていて、まだ政情は不安定である。今訓練を受けている脚、脚、脚を持つ若者たちが何を感じ、どう覚悟して訓練を受けているのかと、一寸悲槍な感じに打たれ乍ら、暫くその行進の脚を見守っていた。

夕方の握り飯が済むとあとは夜を待つだけとなる。今監房には電燈は一つもない。僅かに後側廻り廊下の天井に、十燭光の裸電球が一つあるだけで、真闇に近い状態となるので、暮れると寝るしかない。皆が例のように逆方向に交互に仰臥し、オー

バーをかけて眠りにつく。夜中ふと目覚める。なぜか首筋がもぞもぞしたからである。だが辺りは真闇に近いので起きて調べることも出来ない。じっと目を閉ぢる。背中のあたりがおかしい。しかしどうにも仕様がない。蚤かも知れない。朝明るくなってから調べることにして、眠れぬ夜をいつしか再び熟睡していた。

朝の飯が済んでから、中央に座って満服を脱ぎその上衣を調べる。何も見当らない。その上衣を横において、毛編みのセーターを脱ぎ首筋あたりから丹念に調べ始めたところ居た。なんと虱だった。奥で病臥していた八路兵が残して行ったのかも知れないと、念入りに編み目一つ一つを調べ始めた。所々の目にしがみつくようにして腹が黒くなった奴がぞくぞく見付かった。夜中首筋がもぞもぞしたのは、この虱のせいだったか。そうなれば一匹残さず取り切らねばならない。セーターを済ませたあとは、それも横において冷たさも我慢して冬シャツの縫い目を調べる。此の日の収穫は虱三十数匹だった。虱にやられたのは初の経験だった。徹底的に気が済むまでしらべてから之で大丈夫と、脱いだシャツから再び身につけて、さっぱりした気分となり安心した。つぶした虱は便器の中へ捨てておいた。

この日の昼頃一人の年配の日本人が房内に入って来た。東京音楽団員の知人らしかった。公安分局の許可を得た上で見舞に来たらしい。ほんの僅かな時間、団員と話をしたあとポケットから煙草とマッチを取り出し見舞品として、去って行った。煙草は中国製の「勝利」という銘柄のもので二十本入三函だった。差入れを貰った団員は一函をポケットに入れたが、あと二函の隠し場所に困っていた。暫く考えていたが「あそこしかない」と云いつつ一人が立ち上がって、入口左側に設けられていた扉なし便所の右側天井近くの隙間へ二函を隠して戻ってきた。そんなところに隠し場所があろうとは知らなかったが、よく気のつく人だなと、その周到な観察力に驚いた。

その後は監視を警戒しながら、時々回し呑みの煙草のご馳走になることが出来た。特に新しい中国製の煙草「勝利」の味は絶妙だった。長い抗日戦に勝った歓哀を込めて製造されたせいか、之までの満州産や中国製のものよりもずっとすぐれた最高の味だと評価できるほどいいにほい、いい味の煙草だった。

それにしても、自称東京音楽団の人達の屈託のない振舞いには、私の意表をつくものがあった。年令は恐らく三十才位から二十才を出たばかりの人達であったが、公安当局に収監されているとの意識もないのか、何も苦にしていないようだった。

敗戦国の国民として当然何らかの理由で分局に囚われの身となっているにも拘らず、殆んど何らの心配もしていないようであった。そんな世上のことから全く超越していて、周囲の鉄柵も何の意味も持たない。この人達の心にあるのは歌であり、詩の心だけではなかろうか。そんなことを私が感じたほど明朗な人達であった。それが、ともすれば陰鬱になりそうな私の気持を救ってくれていた。

こんなことがあってから、毎朝の食事後の仕事は虱取りが日課になった。夜寝ていると首筋から虱が入って来るような感じがするので、日課を欠かす訳に行かなかった。その効果はたしかにあった。前日全部退治した筈なのに、次の日は私の努力を嘲笑するように、同じ数ほどの虱がいた。どうしてかその理由が判らなかった。他に仕事がないので、真中に坐って、ゆっくり時間をかけて退治するのが楽しみの一つとなっていた。

一月二十七日になっていたか。もう月日を数えるのも物憂く、なるがままに任せていた。四、五人が小さい車座になって雑談していた時だった。一人が立って坐を離れた。誰もそれに注意しているものはなかった。暫くしてその人は元の座に坐ったが、一本の煙草を半分残して途中でもみ消し、坐り乍ら煙草の函へ収めたあとポケットへ蔵い込んでケロリとしていた。みなそれに気づいていた。その人は私の真正面だったので、私にもよく見えていた。彼が煙草もマッチも持っていたことは意外だった。彼も身体検査もされることなく運よく持ち込むことが出来たのだろうか。ところが皆で一本の煙草を交互に立って、一服づつ廻しのみするときは、仲間に入って同じく一服の馳走に預かり乍ら自分の持っている煙草は独りで楽しんで蔵い込む無神経さと身勝手さに、一寸した違和感を覚えたのは私だけではなかった。誰かが朝鮮人だと小さく呟いたのが耳に入った。それが事実か否かは私には判らなかったが、暫く気まづい空気が流れた。高が知れた煙草のことと割り切ってみなが再び元の雑談に戻っていた。

私は収監以来既に十日を過ぎていた。子供達のことが気がかりだった。構内社宅なので何かあれば、社内の誰かが相談相手になってくれるだろうと思っていても、やはり心配だった。私はとんでもない嫌疑をかけられて、迷惑此の上もないことだった。それを中国側はどう考えているかですべてが決まる。私自身は何ともなすべき術もなく、唯徒らに日の過ぎるのを待つのみだった。自身顧みて、何ら恥じるところはないので、心中は晴明に澄み切っていたが、あとは只天に任すのみの心境であっ

た。私だけでなく、北川君も川原君もこの冤罪にどうしているのだろう。同じ分局内の監房にいる筈だが、今どうしているだろうか。そんなことを考えながら、周囲の鉄柵の辺りを前へ進み後ろへ退き､行ったり来たりしている自分を発見していた。声もなく行き来したり、板の間の板の枚数を数えながら、無聊を慰めていた。そして、動物園の熊たちも恐らくこんな気分なのかと、動物達囚われものの哀れさを思いやっていた。この頃、監房内の水洗便所の水が出なくなった。寒気が厳しくなった精で水道管が凍結したようだった。

何の異変もなければ、南側の監房にいた時と同様、すべてが記憶から消え去ったかも知れないが、水洗便所の水が流れなくなることは、当然珍事出態となるので、今に忘れることがない。何しろ房内七人ほどが毎日用足しせざるを得ないのに、水が流れないとなると困ったことになる。一人が毎日朝夕二回の握り飯と僅かの茶だけで生きていても、尾籠な話だが、出るものは我慢する訳には行かない。便器の中はもう満杯だった。小の方だからとて後の廊下へ鉄柵越しにする訳にもゆかず、矢張り便所へ行って用を達す。人数が多いから瞬く間に便器に盛り上がる程になり、便所のコンクリートの床まで濡れだす始末なので、用便のときは、そっと便器の淵に足をかけて落ちないように用心しながら済まさざるを得ない状態となって了った。

気付いた中国の局員が、誰でもよいから使役に出て来いと云った。二人の日本人が監房から出て命ぜられるままにこそこそ何かをやり出した。水道管の栓が丁度下へ降りる階段の下辺りにあるらしく、局員も一緒になって数人でガヤガヤ言い乍ら作業をしている。凍結していた水道栓に湯をかけていたのか、実情は見えなかったが、暫くして水道が通ずるようになり、便器に堆積していたのも音を立てて流れ出した。一応全部が流れ落ちても、便器にはまだ点々と汚れが付着しているし、床のコンクリートも濡れたままである。房内を点検した中国局員が之を見て、綺麗にするように命じた。その声に応じて、使役に出ていた一人の一番若い音楽団員が「僕がやります」と云うなり、すぐ雑布とバケツを持ち込んで、便所のコンクリートの床を拭き、便器の中まで手をつっこんで、すっかり見違えるようになるまで拭き込んで、綺麗に掃除をした。すべてが終わって、二人の使役は手を洗って房内に戻った。その若い音楽団員はさり気なく仲間の傍へ戻って坐った。平生は人々を魅了するばかりに美しい音を奏でる楽器しか手にしなかったであろう音楽団のこの若い青

年が、少しも躊躇うことなく、なし遂げた汚ない作業への奉仕に真に頭が下がる思いで感激するばかりだった。敗戦後の思いもよらぬ苦い経験、辛い環境に在っても、何ら臆することなく極めて自然に執られたこの若者の行動は、清々しく尊いものとして心に焼きつけられ、数十年経った今もまだ私の胸を打つものとして記憶に甦ってくる。

釈放

一月三十日、収監十六日目がやって来た。朝の高粱の握り飯が配られた。相変らず、パサパサで舌ざわりが悪くなじめない味だった。けれども文句は云っていられない。これが唯一の命をつなぐ糧であれば、よく噛んで呑みこむしかない。南側二階の独房の日本人はどうなったのか、もう姿はなかった。隣の監房への煙草の配給は、いつものようにつづいていたし、隣りにも何人かの収監者がいるらしかった。北隣の独房にも夫々一人宛入っていた。独房への収監者ともなれば、或程度罪が濃く疑われているのかも知れないが、みな日本人らしい。一日も早くこんな場所から出られることを願うばかりだった。

いつものように虱取りを済して、後はすることがないので、この日も動物園の熊のように東から西へ、西から東へゆっくりと鉄棒の数をかぞえ乍ら歩き、次は床の板を数えながら行ったり来たり運動しながら時を過していた。鉄棒が三十数本で、板目が何十数枚とその数を胸に刻みつけて覚えていたが、今はもう正確な数は忘れて了った。

午後も少し過ぎた頃だったか、北側横の鉄柵外の廊下通路に、公安分局の制服を着た背の低い小肥りの中国人が現われたのを目撃していた。その人は監房内を見通すように覗きながら、「奥村（オーソン）」と私の名を呼んだ。名を呼ばれたのでオヤと思いつつ返事をし乍ら、すぐ私は鉄柵の傍へ寄って行って坐った。すると明らかな日本語で「私は徐局長です。貴方の無罪が明白になった。すぐここから出なさい」と告げた。それは当然のことながら、私に対する疑が晴れたことを知って嬉しかった。十六日目で漸くここを出られると思うと、一遍に身も心も軽くなった心地であった。私は釈放の嬉しさをかみしめ乍ら、同房の人達に別れを告げ、開けられた扉の外へ出て数段の階段を昇り地階へ出た。そして収監のとき預けた所持品を受取ってから分局の外に出た。冷たく晴れた外気にふれた身体は引きしまる思いで

その痩せた胸に吸った空気は美味かつた。分局を出て中央通りを北へ吉野町を過ぎ、満鉄消費組合の裏を羽衣町へとはずむ心を抑え乍ら我が家へ急いだ。豫て連絡があったのか、正子は既に二階から下に降りていた。その顔を見て子供達の異常のないことを察知していた。すぐ二階へ昇ろうとしたとき、気配に気付き出て来た一階の樋口君が、無事の帰宅を喜び乍ら「その侭で家へ入ってはいかん。外で全部脱いで風呂が沸かしてあるからすっかり洗ってから着物を着替えて帰るようにせんといかん。脱いだ着衣は全部煮沸するように」と注意してくれた。

樋口方では風呂を沸して待っていてくれたのだった。その細心の心遣いが何とも云えず嬉しかった。感謝しながら外で素裸となって入浴し、半月分の垢をすっかり洗い落としてから、正子が用意してくれた衣類をまとって二階の自宅へ入った。樋口君の話によると、北川君の方が少し先に帰り、同様に風呂を貰って帰ったらしく、又川原君は一週間早く釈放され帰宅していた。渡辺夫人も私の釈放を祝って下さった。久し振りに見る子供たちが、みな元気なのが何よりも嬉しかった。正子は私の衣類を全部外においたままにして次々バケツで煮沸していた。私は自分の迂闊さを後悔していた。樋口君の注意がなかったら、そのまま家へ入るところだった。毎日監房内で虱取りをしていながら、その着衣のままで家へ入る積りだった。風呂まで用意してくれた樋口君の配慮が嬉しかった。そして久し振りの我家で、家族と共に起居出来る幸せをこの時ほど感じたことはなかった。此夜は高粱の握り飯から解放されて、子供らと一緒に乏しい乍ら楽しい夕食を味わうことが、何よりも嬉しく、半月間の暗くて重苦しさも素っとんでいた。

翌三十一日、樋口君は語った。私たち三人が連れ去られた事実を知った高田社長は、樋口を伴い第二公安分局を訪れた。目的は勿論分局長に会って、収監理由の解示説明を求めるためだった。応対に出た係官は三人の氏名が記録にないからとて、第二公安分局に収監された事実を否定した。これに已むを得ず、社長らはその後、公安総局や他の分局へも足を運び尋ね歩いたが、どこも否定の返事ばかりで、すべて空振りに終った。三人がどこへ連行されたのか不明のまま打つ手がなく、日を過さざるを得なかった。それから一週間が経ち、私が依頼した人からの連絡が契機となったのか、川原君が釈放されてからか、矢張り第二公安分局に居ると判り、それが衣類の差入れにつながったのだった。

三人収監の動機が何者かの「投書」よるものであったことは、既に樋口君も承知

していた。しかし、満鉄の地下金庫に預けた金額とぴったりその内容が一致していたことについては、彼も不審を抱いていた。分局では投書があったというが、それが事実投書によるものなのかは詮索のしようがない。このことについては、北川、川原両君と共に社長らと話し合えば、或いは何らかの結論を得られるかも知れないが、帰宅して間もなく三人共が病臥することとなり、遂に機会を逸して了った。高田社長が頼んだ満鉄の関係者が、まさかその事実を洩らす筈はない。ひょっとしたら六十万円を接収したソ連側から何等かの形で中国側に洩らされ、結果いい加減な臆測が、でっち上げられ三人がその犠牲となったのかも知れない。尚「金銭」にまつわる嫌疑による収監と判った後、高田社長が第二公安分局長に、六十万円は「ソ連接収」に終った事実とその経緯を説明したことが、釈放につながったのかも知れないと推測される。その事についても、社長の説明を受ける機会を得ないまま病臥して了ったため、遂に有耶無耶となり、この十五日間が唯敗戦後の異常な状況の中で私達にふりかかった不可解な謎として、今に残って了った。

昨年八月九日ソ連軍が不法侵入してから五か月、その間に多くの日本将兵をはじめ罪なき民間人が■若に斃れ、或いは災禍に遭って命を失い、又は難民として異郷にさ迷い歩いたのに比らべれば、まだ左程の苦痛とは云えないものであったかも知れない。が、災厄はこれですべてが終ったのではなかった。釈放を𠮟び帰宅してから間もなく、それは豫想もしない形で私にふりかかって来た。他の二人も同じような災いを蒙ったが、それを知ったのは後日回復後のことで、まだこの時は知る由もなかった。